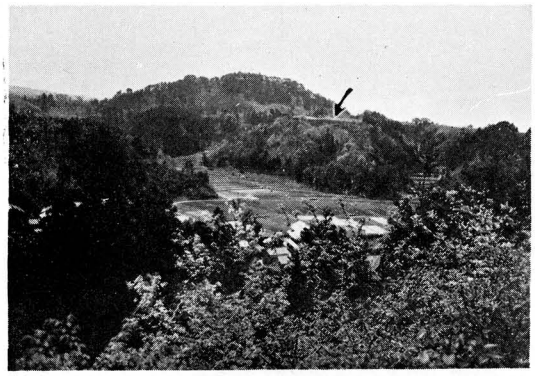
昭和三十四年三月

天神山遺跡調査報告書

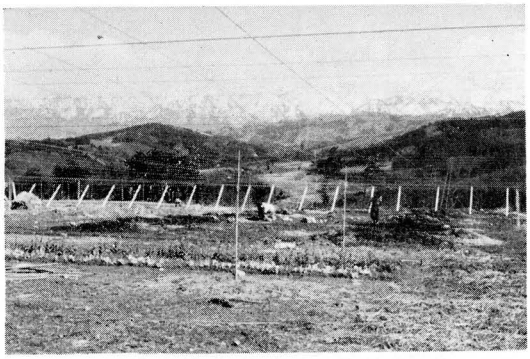
富山県教育委員会
魚津市教育委員会

図版 1　　土　　器　　図版 2

図版 3　　炉　　趾



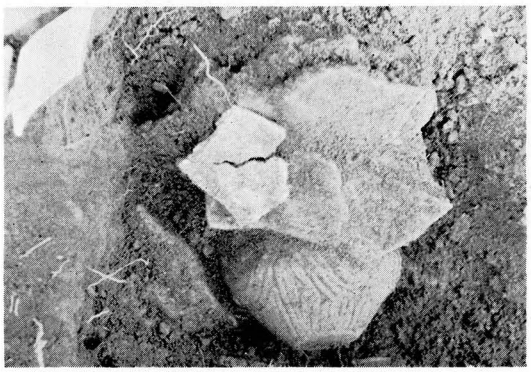
図版 4　遠景　天神山遺跡全貌
（東方台地より望む，矢印は天神山遺跡）



図版 5　近景　発掘地附近
（人のいる所がロ地点）

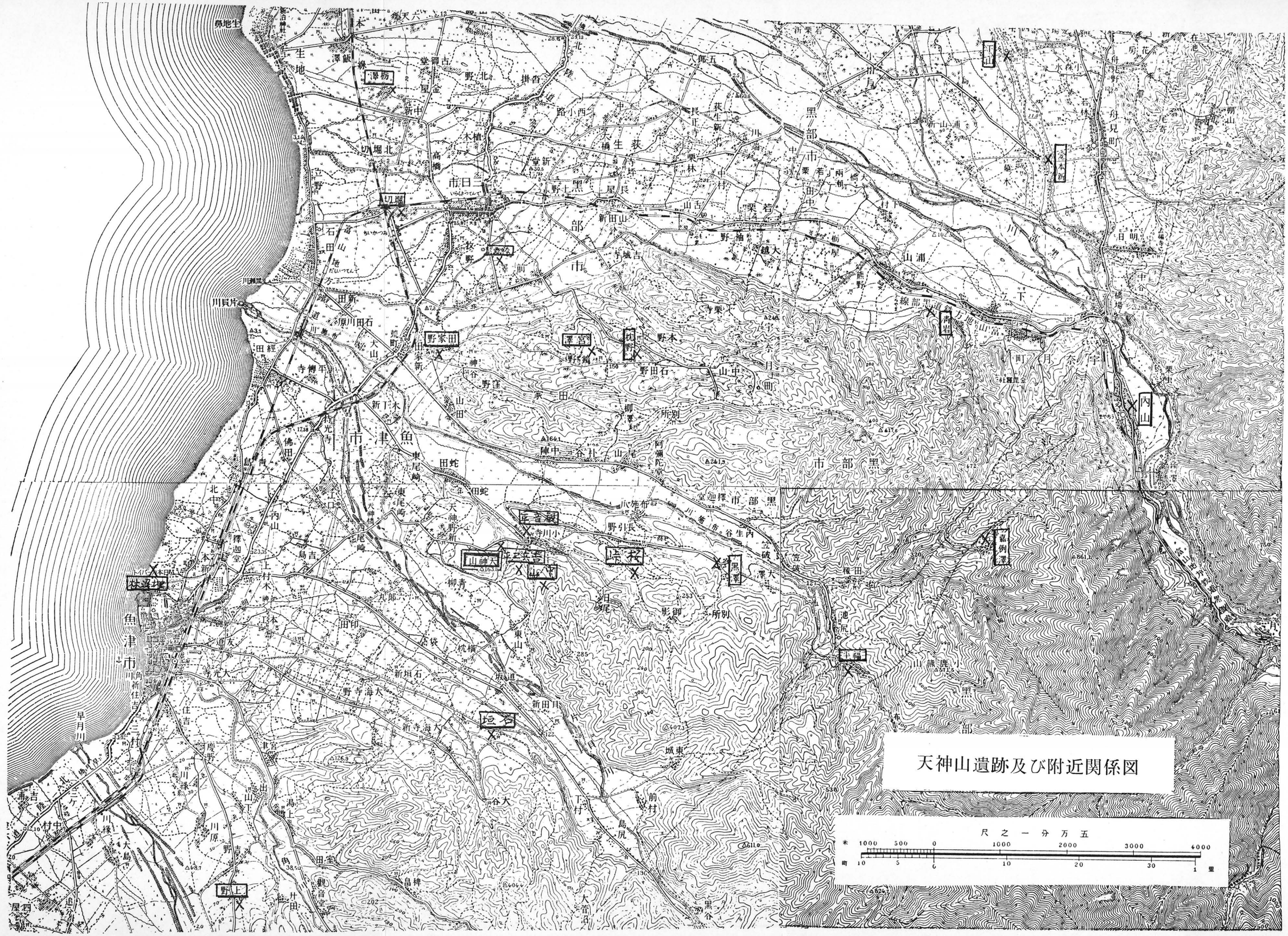
図版 6　発掘状況　（ロ地点）

図版 7　発掘状況　（ロ地点）



図版 8　出土状況
（図版1の土器）

図版 9　出土状況
（炉趾の発掘途中）


天神山遺跡及び附近関係図
尺之一分万五
米 1000 500 0 1000 2000 3000 4000
町 10 5 0 10 20 30 1 里
生地
魚津市
黒部市
月奈宇
川原野
早月川
川裏黒
川長片
野家田
枕野
内山
青岩
嘉例沢
生福
野上
天神山
城東
前村
下村
大谷
黒谷
大管沼
観音堂
田室
島尻
黒部川
富山地方鉄道線

はしがき

最近、埋蔵文化財に対する関心が高まり、県では昨年七月、魚津市教育委員会と共催の下に、県考古学会等の後援を得て、縄文文化の遺跡として有名な魚津市天神山の一部を発掘した。

天神山の周辺からは同じ縄文文化でも時代を異にした石器、土器が多数出土しているが、その中でも、天神山遺跡は出土遺物の種類、量ともに最も豊富であり、規模も大きく、文様もけんらん豪華な隆起彫刻文が多い。これは一般に縄文中期の遺物といわれるものである。

この報告書によつて、本県古代文化の様相が如実に物語られ、深い感銘を与えるばかりでなく、本書が学界に益するところまた大なるものがあると信じて疑わないものである。

ここに、調査及び刊行に当つて絶大な協力を賜わつた魚津市教育委員会並びに県考古学会湊晨、県文化財調査委員早川荘作、魚津西部中学校教諭広田寿三郎、大谷清瑞各氏、外関係者各位に対し、厚く感謝の意を表し、併せて本書の広い活用と文化財の保護に一層の御協力を賜わらんことを希望し、刊行の序とする次第である。

昭和三十四年三月

富山県教育委員会教育長

川瀬善一

序にかえて

古くから、天神山の麓布施川の段丘の畑地から矢の根石や石斧の類が土器の破片と共に、多数発見されて、心ある人々の関心を深めていた。素人眼にも幾千年か昔、われわれの祖先が営んだ生活の遺跡であろうと想像された。それで一度専門家の指導を待つて発掘調査し、先人の生活の跡を究明したいと念じていた。幸に、今回県教育委員会、県考古学会の御援助と地元関係者の御協力を得ましたので、魚津高校並びに魚津市東、西中学校の、クラブの生徒数十名と、社会科担当教員の御努力によつて第一次発掘を試みました。予期に増した成果を得、数々の貴重な材料を収めましたことは、全く、この事業を直接に指揮して下さつた光学坊大谷清瑞氏、考古学会湊晨氏、魚津西部中学校教諭広田寿三郎氏等の適切な御指導によるもので、ここに深甚の敬意を表する次第であります。

尚、炎天のもとで黙々として、汗と土にまみれて細心の注意を傾けて、発掘に努力された生徒諸君の労苦にたいして、厚く感謝します。

此の日、たまたま碧天に五色の彩雲が現れて、この事業の瑞兆を表したことを附記する。

魚津市教育委員会教育長

高井弥吉

目次

一、緒言……一
二、遺跡の概観……二
三、調査略誌……三
四、発掘経過……五
五、遺物報告……八
A 自然遺物……八
B 石器……八
C 土器……九
六、本遺跡周辺の遺跡、遺物……一二
七、結語……一四

一、緒　言

一九五八年七月二九・三〇日の両日、富山県教育委員会、魚津市教育委員会の共催で、富山県考古学会湊晨氏の指導のもとに、天神山遺跡を調査発掘した。これには、地元の魚津市小川寺光学坊住職大谷清瑞氏の協力が大であつた。

思うに天神山遺跡は、呉羽町北代遺跡、氷見市朝日貝塚等と共に、早くからその存在が知られ、特に出土点数の多いことと縄文文化の中期の代表的遺物を出土することとで注目されていた。

従つて、多くの人々によつて表面採集が行われ、時には試掘も行われたようであるが、いまだこれに関するまとまつた報告書の作製が行われていない。

ここにおいて、ささやかなから、前記発掘の結果をまとめて、報告書を作製することとした。尚、報告書作製にあたつては、曽つて先人の手によつて集められた資料のうち確かなものもとりあげたが、本報告書は主として、前記の発掘の結果を中心として作製したものである。

発掘調査は、富山県考古学会湊晨氏の指導のもとに、魚津高等学校教官及び歴史クラブ員、魚津西部中学校、東部中学校、布施中学校教官及び歴史クラブ員等がこれに当つた。

又、本報告書は主として湊晨、大谷清瑞、広田寿三郎の三人が協議執筆した。

又、本発掘における出土品は、すべて、小川寺光学坊に保管されている。

二、遺跡の概観

北陸線魚津駅から東へ片貝川に至る途中、約一粁程走つた頃、右側車窓の一帯に続く台地上に、乙女の乳房のようにこんもり盛り上つた小山がぬきんでている姿を見るであろう。これが天神山で、その山麓が今度発掘した天神山遺跡である。魚津駅からバスの便がある。正しくは、魚津市小川寺字天神山三六五番地及び三七〇番地で、出土地の面積は、約七、〇〇〇歩余にも及ぶ遺跡である。

毛勝嶽、僧が岳の山塊の末端が次第に海へ向けてゆるやかに流れ、その丘陵地帯は最後に片貝川右岸の洪積台地を以て終りとなる。その最末端の台地上に突出した瘤が景勝地天神山である。海抜一六三米、魚津市の観光地として東に雪を頂いた立山山脈を望み、西に魚津の冲積平野を隔てて、有磯海を見下し、遠足やハイキングに多数の観光客を誘引している処である。（附図第一）

歴史的には、天神山は、戦国時代に山城として築かれ、魚津城や松倉城と相対して、曽つては上杉氏や椎名氏の争奪の地であつた。その地名の由来も、口碑には、将軍足利義材（よしたね）が京都を追われて守護代神保氏を頼り、越中にかくれ、さらに小川寺千光寺に逃れた際、その守護神天神像を千光寺背後の峯に祀つて、かく名づけられたと伝えられている。山麓の千光寺は、新川地区での名刹でその名残りは天神山麓の地名に坊と称する地名や、千光寺にちなんだ地名が多いことによつてもわかる。谷を隔てた丘には、延喜式内布施神社がある。

さて遺物出土地は、この天神山麓の東方一帯の畑地である。遺跡地は赤褐色土壌の平坦な畑地で甘藷・煙草・果樹等が栽培されている。

この地は、海抜九五米の平坦な舌状台地で、後に天神山を背負い、前は小川寺の谷川に臨んでいる（地図参照）。曽つては森林繁茂し、背後の天神山は屏風のように寒風をさえぎり、二～三〇米崖下には、豊かな清水が湧出していて、水と日光に恵まれた、原始人の生活には、恰好の居住地であつた事が想像される。

表土は約三〇糎の耕土で遺物包含層は一般に浅い。然し場所によつては一米以上に及んでいるところもある。出土品は割合に多く、曽つて記録されている物でも土器には縄文文化中期の雄大なもの、石器には、石斧、石鏃、石錐、石錘、石匙、石棒、凹石、たたき石、環石、装身具（曲玉や有孔石器）等種類が多い。註①

この天神山の周辺のうねうねと起伏する丘の上には、縄文文化遺跡が各所に散在している。註②谷を隔てて東方五〇〇米の地に中山、一粁東南方に吉兵衛平、さらに桜峠（東方二粁）、黒沢（東方三・五粁）、嘉例沢（東方九粁）、福平（ふくひら）（東方七粁）があり、また南方には石垣（註③）（南方三粁）、上野（うわの）（南方六粁）、北方には田家野（北方三粁）、海岸には魚津埋没林（西南方五粁）等が指呼の内に散在する。此等の遺跡は夫々、縄文文化の早期前期中期後期晩期のうち或る時代の遺物を出土しており、天神山遺跡もそれらとの関係において論ぜられねばならぬが詳細は後の記述にゆづることとする。

註　①早川荘作氏『越中史前文化』

註　②富山考古学会編『富山県石器時代遺跡地名表』（森秀雄氏『大昔の富山』所載）

註　③下新川郡役所編『下新川郡史稿』上巻

三、調査略誌

本遺跡発見の起源は一八七〇年頃（明治初年）のことである。当時山林であつたこの地を開拓した際、石器・土器の破片が続々と発掘されたのが最初である。然し、当時は石器・土器であることを知らず、恐らく天神山城時代の戦死者の埋骨遺跡であろう、と唱えられていた。今でも里人には土器を骨壺（こつがめ）と思つている人がある程である。一八八七年（明治二〇年）頃、加積村北某がこの地で石斧を発見して初めて古代人の遺物であると唱え、注目したことに初まり、其の後、小川寺大森憲一氏（この地の開拓者）及び旧魚津中学校吉沢庄作氏が石器時代の遺跡であることを唱導し出して、ようやく世人の関心を引くようになつた。

一九〇四年（明治三七年）九月、当時東京帝国大学人類学教室の鳥居竜蔵氏が徳川頼倫（よりみち）公爵と共に吉沢庄作氏の案内でこの地を踏査しておられる。

一九〇八年（明治四一年）八月、東京帝国大学教授坪井正五郎博士が同じく吉沢氏の案内でこの地を実地踏査しておられる。

当時の報告によれば『下新川郡史稿上巻』（原文のまま）

石　器

1　石斧　大小様々の形の磨製、半磨製、打製のものあり、原石は磨製は主に蛇紋岩、打製は主に硅質岩石多し。

2　石棒　多く産せず、主として石英粗面岩質凝灰岩で造られているため質粗造である。大型のものは頭端、鉢巻形部周囲一尺に余る。

3　石鏃　硅岩製と黒燿石製とあり、形の種類が少ない。後者は透明で美しい。

4　砥石　砂岩で今日の荒砥と全く同じ。磨くのに使用した跡が明瞭である。

5　石斧の台石　長径四～五寸、短径二～三寸にして其の中央に凹める跡を存す。

6　球石　直径七～八寸の球形、深造岩。

7　錘石　長径二～三寸、短径一～二寸、平楕円形で両端には摺傷あり。

8　装身具　魚形の光沢ある磨製、原石は蠟石の如し。中を貫通せる孔がある。

9　石刀　黒燿石製、長六寸巾五分の剃刀形、一側は非常に鋭利で紙でも断てる。

土　器

土器は破片が非常に多いけれども性質脆弱で保存が悪く、全形の整うたものが少ない。瓶、壺、其の他、諸種の容器があり、土偶は発見せられず。

注　土器の説明がまだ殆ど行われていない。

一九二六年（大正十五年）版『早川荘作氏著作の越中石器時代民族遺跡遺物』によれば、（原文のまま）

下新川郡西布施村天神山

発見遺物　　摘　　要

大環石か　　径六～七寸の扁平自然石の中央部の両面より孔を穿てるもの。

大石棒　有頭のもの。

石　斧　精製磨石斧多数、中に刃部を殊更に摺り落せるものあり。

装身具　白緑色のもの（滑石製品が多い）。

石　鏃　黒曜石、水晶、燧石、蛋白石、石英等の石質、長さ三〜四分より一寸五分位まで、有柄少なし。

石　匙　蛋白石、木の葉形、二〜三個あり。

叩　石　自然石長楕円形、打撃痕は一個又は二個あり。

錘　石　多し。

土　器　甕、鉢、壺等の文様鮮なるもの多し。土錘、紡錘車等も発掘さる。

石　鋸

一九五五年（昭和三〇年）五月、同志社大学酒詰仲男氏指導のもとに、富山県考古学会湊晨氏等が中心になつて試掘された。その箇所は今回発掘の「ハ」地点の北側である。その地点は深さ一〇糎〜二〇糎の表土の下に、厚さ一五糎〜三五糎の褐色又は黒色壌土の包含層を持ち、その下がローム状赤土の基盤となつていた。故に基盤は地表から三〇糎〜五〇糎の地下である。出土した土器は今回の出土品と全く同期のもので、その遺物の単純性から「天神山式と名づけてもよい」との意見も出ていた。即ち、特長は一般に大型で器型は甕、鉢を主とし高さは五〇糎直径四〇糎に及ぶものがある。巨大な把手を有し、文様は特色ある隆起帯文、爪形文を有する。また朱塗土器も出土した。然し二日間に亘り発掘したが、折角の出土品が発掘途中、心ない人に持ち去られたのが残念であつた。さらに基盤の上からは焼土、木炭片等多数現われ、基盤は踏み固められた形跡があり、穴らしきもの十一、環状に並ぶ疑問の自然石十二個あり、此等は住居趾か炉趾の存在を暗示した。これがこの度の発掘の動機の一となつたのである。

石器については、曽つての出土品と全く同じい。

その他、幾度かの試掘や耕作中に自然に発掘された出土品も相当にあるだろうが、其等については記述すべくもない。

現在、天神山遺跡の出土品の所蔵者には魚津市小川寺光学坊、魚津高等学校、魚津市埋没林館、黒部市佐度忠作氏、富山市早川荘作氏等がある。その中重要土器は光学坊に、重要石器は早川氏方に多い。

四、発掘経過

一九五八年四月、富山県教育委員会、魚津市教育委員会は、地元の光学坊住職大谷氏や地主、耕作者の協力を得て、耕作畑地の植付け前に予定地の杭打ちをした。即ち附図2の如く昭和三〇年の試掘の経験に鑑み、その試掘地に接し、または相当の距離をおいた。それは、この地が遠からず一面の葡萄園に転換されるからであつた。場所は魚津市小川寺字天神山三六五番地、三七〇番地である。曽つては小川寺千光寺十六坊の一、宝泉坊のあつた地である。この地から往時は布目瓦を出土したこともあつた。土質は赤褐色土壌で地層は殆ど水平である。

発掘日は暑中休暇に入つて間もない七月二九日から三日間の予定。幸に連日の雨もからりと晴れて周囲の山々は目にしみる程青い。然し、赤禿の台地上は土用の酷暑とて焼けつくように暑い。

参加者は県教育委員会有沢主事、魚津市教育委員会高井教育長に、山本社会教育課長、松倉主事、富山県考古学会湊晨氏、早川荘作氏、地元大谷清瑞氏、魚津高等学校寺松氏、東部中学校菅野・高島の両氏、布施中学校伊藤氏、西部中学校野崎・広田の両氏及びその歴史クラブ員、さらに耕作者大森氏、考古学会員等実に多数であつた。直接発掘担当者は、高校、中学の歴史担当教官及び歴史クラブ員であつた。

発掘地点は四か所、それぞれ学校別に担当した。次に各地点の発掘地選定理由を記そう。（地図参照）

イ　地点　断崖に近い緩傾斜地、包含層厚く土器・石器の多いことが予想されるところ。魚津西部中学校担当、面積二米×六米、今春、中期の大甕（胴体の高さ三五糎、口径三三・四糎底部を欠く、図版13）の出土した地点である。

ロ　地点　丘のほぼ中央で、土器・石器の表面散布も多く、特に今度の発掘の主目的である住居趾があるらしく想像されるところ、予想が見事に的中して後程炉趾が発見された。面積二米×六米、魚津高等学校担当。

ハ　地点　南の断崖に近く、一昨年試掘の隣接地であり、その際住居趾らしく多数の柱穴らしきもの、焼土、木炭屑が発見されたが遂に確認されないで終つたため、今回続けて隣接地を発掘することにした。二米×四米、魚津東部中学校担当。

ニ　地点　崖端に近い平坦地、特に土器・石器の埋没の多い地点。後程、殆ど完全に近い土器（図版1）を発掘した。二米×四米、布施中学校担当。

調査の経過

――特に「ロ」地点を中心にして――

天神山は曽つて幾度かの試掘に際して、殆ど同型式の遺物を出土している。今回も又四か所共に同型式の出土品であつたので最も発掘価値の高かつたロ地点を中心に経過を書くこととする。

七月二九日午前一〇時から作業開始、湊氏直接指導、魚高歴史クラブ員男女八名、寺松、大谷、高島氏作業担当。最初は不慣れで発掘方法指導に手間どつたが、午後からは熟練してきた。

先ず表面採集、続いて採集を続けながら表土を取除く。この中からも沢山の土器破片及び石器が拾いあげられた。表土（黒褐色耕土）の厚さ一五糎、表土下直ちに各点で土器・石器が顔を出している。高校生は夢中になつて発掘を続ける。

そのまま押しつぶされた形の甕の破片群、或いは片面のみの破片群など割合まとまつて出てくる。何かに使用されていたらしい自然石も多い。磨製石斧、打製石斧も多い。石鏃一個、凹石（穴一のもの、穴二のもの、蜂巣状のもの）数個、砥石の破片、叩石、石錘も出土する。土器の破片は非常に多い。特に幾つもの土器が重なり合つて掘り上げられ、石器、土器、自然石が一か所にかたまつて出土するのが注目される。土器は大柄な文様、縄文、無文、部分的には口縁部、側面、底、把手等出土する。地層は水平で、全部赤褐色土壌の単層だ。

此等の作業は八粍映画にも撮影した。

土用の太陽は、じりじりと焼けつくように暑いが流れる汗を汚れた手では拭くことも出来ず作業を続ける。夕方、顔を出した土器類は全部掘り上げて作業を中止する。発掘品はすぐ光学坊へ運ぶ。先年試掘の際盗難にあつたからだ。

翌七月三〇日幸に今日も晴天、朝早く光学坊の宿舎を出て発掘を続ける。今日は高校生も作業に慣れて仕事がはかどる。自然石が相当出てくる。土器・石器がかたまつて出土する。

一〇時頃、東南の青空高く七色の彩雲が出現し、紺碧に澄み渡つた空高く巻雲がオーロラのように輝く。何の瑞兆だろうかと喜ぶ。

誰もが初めてだ。

そろそろ基盤が出てきた。包含層約三〇糎、地表から約四五糎。実に浅い。基盤の追跡が進むにつれて細長い自然石に囲まれた矩形の石組が現われる。炉だ。待望の炉が遂に出現した。

炉の発掘状況（発掘図及び写真参照）

洗い出された基盤のほぼ中央に花崗岩の四個の細長い自然石に囲まれた炉趾が出てきた（外に小石一個）。縦横四〇糎に五〇糎の矩形。方向は正しく南北を指している。全くいろりの炉縁の形である。詳しくは全部花崗岩で北方の石は一〇糎×四〇糎。南方は六糎×三六糎、東方は一〇糎×三〇糎、西方は八糎×二五糎の四個の石に矩形に囲まれ、東と北の石の継目は僅かばかり空いている。その継目を埋めて一個の丸石が東北隅に置かれていた。

炉の内側に焼土がかたまり、外側に木炭屑が散乱していた。炉の周囲に自然石、土器が散在している。丁度腰掛石に手頃のように、南西隅に厚手無文大皿状の土器――精製ピッチ塗り、さらにその上に朱塗り――があり、又灰赤色の大型無文土器もあつた。

傍に浅い穴（直径一六糎、深さ一四糎）が一個あり、さらに将来、発掘を拡大すれば住居趾の規模が明らかにされると予想される。然し附図4にみられる様に炉趾は割合に浅い包含層の下にあり住居趾の機構、引いては竪穴の存在の確認は将来の調査にまかせられることになつたが困難が予想される。何れにしても炉趾の面は荒された痕跡はなくその点明るいものがある。

かくて今回の発掘目的の一に住居趾の発見があつたのだが将来その可能性を非常に大にした。さらに炉趾のある基盤を破つて、その下の地層を調査すれば厚さ一二糎の腐植土壌があり、その下が当時の基盤、赤褐

色ローム層土であることが確認された。（附図4）

なおこの一二糎の腐植土壌の中には遺物は包含していない。

午後四時頃、基盤の調査も凡て終り全発掘を終了した。

炉趾や穴は油紙、ビニール紙、白砂でおおい、その上に土をかけて原形のまま保存した。将来の発掘継続の際の復原にそなえたのである。

其の他の発掘地点の経過

「イ」地点は最も深く、表土三〇糎、包含層七五糎、基盤まで一米五糎あり、労力大きく、遂に時間の都合上発掘途中で中止した。これは緩傾斜地であるため、流土が堆積して深くなつたのであろう。磨製及び打製の石斧、たたき石が特に多かつた。

土器の発掘数量は最も多かつたが、その種類は「ロ」地区に同じい。特に細長い大形自然石（この台地は全くローム層土でおおわれ、このローム層は目立つた自然石のない地層である）が多数発見され、それが人為的に配置されているようにも見えたが、その形態等は遂に確認するに至らなかつた。

ハ地区からは期待されたような住居趾が発見されなかつた。然し、うづ高く焼土が盛り上つた場所があり、その傍から滑車型朱塗耳飾が発見された。ここは出土品少なく、包含層が最も薄く一日余りで基盤に達した。

発掘は三日の予定であつたが大体完了したので二日で終つた。

附記

今春三月二七日（一九五九）昨夏発掘した炉趾を中心にして、「ロ」地区に直角の方向に（正しく南北に）トレンチした。目的は住居趾の機構調査にある。北方は巾一・五米に長さ五米、南方は巾一・五米に長さ二米、先ず北方から着手した。耕土約二三糎掘上げて包含層に達する。早くも土器や石器が黒褐色の土中に顔を出している。縄文土器、無文土器、瓶、壺、平皿、破片やほぼ完形品等非常に多い。中でも直径五〇糎高さ一〇糎の無文平皿が逸品であつた。後程殆ど完全に復原出来た（図版17）。土器としては、この外に原形を保つている物に、上部の欠けた瓶が三個あつた。時代は全部同じく縄文中期である。石器としては打製石斧、磨製石斧、叩石、凹石が主であつた。

包含層の発掘約四〇糎にして基盤に達した。北方トレンチの基盤には炉趾に近く、巾六〇糎高さ八糎の赤土土堤があり、その外側に巾二〇糎深さ五糎の溝が続き、その外側は一面に平坦な踏み固められた地盤で異状を認めなかつた。

土堤のあたりには木炭屑が多く散乱していた。平坦面には小円柱状の穴が六個あり、直径は小は一二糎程のものから大は一五糎位まで、深さは一〇～二〇糎程であつた。中に一個楕円形（長径四〇糎短径二〇糎）で深さ三〇糎の大きな穴もあつた。

南方トレンチの出土品も、これと殆ど同じで続々出土したが、日没のため途中で中止した。

さて、待望の住居趾は赤土の土堤、溝、円柱状穴、共に規模が小さ過ぎて多くの疑問を残し、遂に確認し得なかつた（図省略）。

さらにこれより約三〇米南方のブドウ畑中に楕円形の花崗岩七個（長径五〇糎短径二〇糎程の大きさ）で半円形に埋めた――直径二米――環状石形の疑問の敷石らしきものがあつた。然しその何たるかを確認し得なかつた。

尚当日の発掘品は全部光学坊に保存されている。さらに遺跡地附近に保存館が魚津市にて建説中である。

五、遺物報告

A 自然遺物

人骨、獣魚骨角の類は出土しなかつた。また前述のように、一般に存在する筈がない自然石が包含層中に相当多く、その人為的配置は確認されなかつたが、発掘の経過の中に関心がもたれた。大きさは大小様々ではあるが、特に五〇糎前後の細長い石が多いのが注目される。

石質は花崗岩又は砂岩でその位置は包含層の各点に出土していることが特色とみられる。またひすいの原石が一個出土した。五糎×三糎の楕円形の大きさである。

B 石器

今度の発掘で採集したものには、打製石斧、磨製石斧、石錘、石鏃、凹石、丸石、砥石、たたき石がある。

参考までに曽つて出土した其の外の遺物は、環石、大石棒（単頭）、石匙、石鋸、有孔石斧、装身具（曲玉、小玉、其の他有孔石器）等あり、其の中石斧、石錘、石鏃が多い。

a 打製石斧

1　全面共打製のもの

短冊形が大部分で、全長一二糎～一三糎のものが多い。さらに短冊形がくづれたばち形打製石斧も少々ある。分銅形はなかつた。石質は砂岩が多い。其の他、凝灰岩、輝緑岩、玄武岩又は変朽安山岩等様々である。数は完形五個（内訳「イ」地点二個、「ロ」地点二個、表面一個）欠損したもの「ロ」地点一個であつた。（図版10打製石斧 実測図1打製石斧）

2　片面は自然面を利用したもの

右様の型式のものの中、完全なもの三個「イ」地点一、「ロ」地点一、表面一）欠損一「イ」地点）があつた。（図版10打製石斧 実測図1打製石斧）

b 磨製石斧

すべて短冊型である。所謂中形の一〇糎前後の大きさが大部を占め、断面はすり切りを思わせる角のあるものが全部である。一部五糎程の小形のものも混じつている。完成品六個、他は一部欠損したものである。石質は変成凝灰岩で、産地はこの附近では池尻発電所（東布施）附近に出る。硬度は石英質の多少により変化あり、色彩も夾雑物によりいろいろ異なる。特長ある淡緑色の縞模様は変成した時に出来た緑簾石である。完全なもの六個（内訳「イ」地点二、「ロ」地点一、「ハ」地点一、表面二）で欠損二個「イ」地点一、「ロ」地点一）であつた。（図版10、11磨製石斧 実測図1 2磨製石斧）

c 石鏃

雁股形で二・五糎×二糎のものが一個あつた。石質は玉髄である。（「ロ」地点出土図版12、石鏃24実測図2、7）

参考までに、天神山遺跡からは、石鏃は過去に於て相当に採集されている。形は有柄、無柄両方共にあるが、出土数量は有柄の方が少なく全体の約一〇分の二、無柄の方は一〇分の八程であろうか（早川荘作氏談）。但し今回の発掘には少なかつたといえる。

d 石錘

小さい自然石の長径の両端を打ち欠いて糸かけとしたもの、全長五糎程で割合小形のものが多い。中には三糎程の小形のもある。

また、短径を打欠いて糸かけとしたもの一個あつた。石質は硬砂岩、変朽安山岩である。出土数八個（「イ」地点二、「ロ」地点四、雑中に二）石錘は曾つては相当出土した。（図版11、石錘　実測図2石錘）

e　凹　石

両面に一対の凹みを有するもの、片面に二つの凹みを有するものの二種あり、凹みは明瞭である。石質は変朽安山岩である。今回の出土は四個（内訳「ロ」地点一、出土地不明三）であつた。（図版12凹石　実測図2凹石）

f　たたき石、丸石

明瞭に打痕を残しているたたき石と打痕のない丸石とあり、共に大きさは直径七糎又は八糎程である。特に丸石が多い。

g　砥　石

硬砂岩の砥石で、表面の平なもの、すりへつて波形に凹んだものがある。出土二個、産地は、この附近では黒部市福平の奥にあり、今でも砥石として切出している。（図版12砥石）

h　其の他

ひすいの原石一個、黒燿石片三。

×　　×

参考までに、本遺跡からの著名な出土石器の所蔵者は早川荘作氏、佐度忠作氏で、見事な装身具（曲玉、有孔石器）、石匙、石棒、環石、沢山の石鏃等がある。

C　土　器

本遺跡から出土した土器は、破片ながら非常に多く、目下整理済のものだけでその量石油箱一五箱に及ぶ。また包含層は一般に薄く、単層であることは前述の通りで、どの地点に於ても層位的事実は認められなかつた。

完形に復原することが出来るもの五個、これに準ずるもの三個あり、その何れも本遺跡の特長を現わしている。即ち甕、深鉢形で、器全面に太い隆起帯文を充填し、文様の基線、即ち口縁部、頸部、把手、或いは単独文様の境界を区切るに特に高い隆起帯をつける。そしてその隆起帯上に半截竹管かへらでもつて連続した爪形文か刻み目をつけてゆく。但し、八個の土器の中、二個は無文である。その無文土器の口縁部は内反するが、他の文様のある土器はすべて多少なりとも外反している。また文様のある土器の口縁は大きく朝顔形に波状となつているか、僅かながらも把手をつけて平縁に変化を与えている。然し口縁部が内反している無文土器は把手らしきものは見られず、完全な平縁らしい形をとつている。何れにしても縄文文化の中期を示す。大型、雄大、華麗な造り方で、特に把手には特長ある造り方が多い。

器形は前述の甕、深鉢の外、壺、平皿、土鍋状等の形があり、高さは大は五〇糎余とも想像され、口縁部の直径四〇糎を越えるものもあると思われる。なお土器の厚さは五粍から一〇粍までで、中に巻上げ製法を明瞭に残した小土器も見られる。

色は一般に黄褐色、茶褐色が多く、一部焼度の不足によると思われる黒色のものもある。

又、無文でその上に朱塗りの土器破片十数片がある。

底部は殆ど平底で、一部揚底のものが見られた。また底部は製作時の敷物による文様がないのが普通で僅かに簾、網代状座痕のものがみられた。

また特殊な製品として耳飾がある。なお今度は土錘は発見されていな

い。

以上本遺跡の出土土器を概観したが、更に文様によつて分類する。

土器分類

a 類

基線隆起帯に連続爪形文を施したもの。

太い隆起帯文が甕又は壷の口縁部や胴体部を取巻き、その主となる隆起帯の上に半截竹管による連続爪形文が施されている。この連続爪形文の施されている隆起帯文が曲線、唐草、渦巻状を呈しており、それに平行した隆起帯を以つて器面全部を被い、縄文は割合に少ない。隆帯の曲線はよどみなく流れ、その線は見事な位である。その点次のb類とは著しい対比が見られる。また地文の隆帯と基線連続爪形文隆帯との間に肉盛の差が少ないのが一般であつてこの点に於いてもb類との差が見られる。口縁部は波形を呈するものが多く、また特長ある把手がついている。

今度の発掘で、殆ど完全なものとして、高さ及び直径共に一四糎の壷が出土した(図版1及び実測図3ノ1)。また三三年春出土したものに、高さ四三糎(現存は二八糎)胴の直径三三糎の甕がある。(図版13a類土器 実測図3ノ2)小破片中最も多いのはこの文様である。降起帯の巾は普通一〇粍である。

数は完全壷一、口頸部一(全周の三分の二図版13実測図4)、また大型破片としては口唇部と口縁部破片二四片、口唇を欠く口縁部一四片、胴体の上部と思われるもの一四片、口頸部八片(内特に大きく複元出来るもの一点)口縁部三片(内特に複元出来るもの一点)口頸部一六片。胴体(縄文あり)八片。(図版13 実測図3 4 5 拓本1ノ1 2 3 5 7 拓本2ノ3)

b 類

基線降起帯上を、へらによつて連続刻目をほどこし、a類の連続爪形文に類した効果をもたしめたもの。(擬連続爪形文と仮称する)

b類土器はa類土器の文様に対し、相当異なつた感じを与えるものがある。

1 器形は大体同じながら、多少なりとも硬直な感を受ける。即ちa類土器のふつくらした線に対し、稍々くずれたものを感ずる。

2 文様は、a類土器のそれは器面全般をあますところなく充塡しようとする努力が窺えるに反し、b類土器は多少なりとも手を抜くところがあるように思われる。

3 同じ曲線、唐草、渦巻文様であつても前者のすつきりした曲線に対し、後者のギゴチなさは、あらそわれないものがある。

4 口縁部把手の豪華さにおいて、後者は一段と劣るものがある。

5 平行降帯文で器面を埋めることは同じいが、時に櫛様のもので器面を上下左右に平行沈線をつけ、格子目文と降帯文の間を埋め、降帯文に代ることがある。これはa類土器に多く、b類土器に少ない。

6 隆帯の断面はa類土器の丸みを帯びたのに対し、b類土器は前者に類するものもあるが、実質的に平たく帯状になつているものが多い。

7 基線擬連続爪形隆帯は前述の如く一般地文より高く、肉盛がしてあるのが普通である。

今回、高さ二四糎、口径二四糎の鉢形土器をほぼ完全に復原できた。(図版2)

破片の数もa類についで多い。略記すれば、目ぼしい物のみでも、口辺から胴体部八片(内特に大きなもの一点)及び切片多数。口縁部六片、

口辺を欠く口縁部一〇片、胴体三二片があつた。

（図版14、b類土器実測図5b類土器実測図6b類土器拓本1ノ4、6拓本2ノ1、5）

c　類

隆起帯の根元に（陵線上ではない）半截竹管やへらで連続刺突したもの。（小三角連続刺突文と仮称する）

さらに平行隆起帯の間に鋸歯状の文様をつけ、または、その周囲に全面的にへらで連続刺突をしている。其の他は前記のa類に似ている。関東の阿玉台式に酷似している。この破片は割合に少ない。口縁部一二片（内大きなもの一片）口辺三片、口頸の一部及び胴部一六片であつた。

（図版15c類土器実測図7c類土器拓本2ノ248）

d　類

隆起帯の間の溝に沈刻を施したもの。突出せる平行隆起帯の間の凹部に半截竹管又はへらによつて、爪形又は八の字形の連続文をつけてある。数は口縁部三片（破片とは言い難い大きさのもの一片）口縁部六片其の他八片。（図版15d類土器実測図8d類土器拓本2ノ7拓本3ノ2）

e　類

a類b類の主特色がなく、隆起体のみによつて、施文されたもの。

太い隆起帯が土器の口縁部から胴体部へかけて取巻き、胴部より底部へは大体上下に平行した隆起帯文をつける。仔細にみれば、a類、b類土器の変形で、連続爪形文や刺突文を施さない丈のものである。

（図版14e類土器図版16e類土器実測図6、e類土器5、6）

f　類

縄文を主とした土器。

殆ど縄文のみの土器で、製法は割合に粗雑である。小破片のみで、原型は推定し難いうらみがある。a類b類が雄大な装飾品的土器ならば、これは粗雑な実用品の感がある。出土数量は非常に多い。

（図版16f類土器拓本3ノ1346）

g　類

無文土器　精製粗製の二種類あり。

精製品は焼成度高く堅くて、表面が滑らかで堅牢である。出土品には縦横二八糎×一〇糎の大皿状の大破片あり（原型の推定直径六五糎高さ七糎の大平皿）。

又、縦横二八糎×一九糎の平皿の底状のもので、無文厚手硬度高く堅牢で内側にピッチが塗られ、さらにその上に朱が塗られている。炉の側からの出土品である。

粗製品は焼成不十分で、表面ざらざらし、製法粗雑である。出土品には水甕の側面で縦横三一糎×一七・五糎の灰赤色のものあり（原形の推定直径三〇糎高さ不明の水甕状）、無文土器の数も非常に多い。その数量は、全形が想像されるまでに復原されたもの一点、口辺から上部の復原されたもの一点、同一土器であるが復原困難なもの四〇片、その外、朱塗り土器破片多数あり、また極めて薄手の朱塗り五片、其の他無数で目下整理中である。

附　記

その後昭和三四年三月二七日発掘のほぼ完形の直径五〇糎の平皿状の粗製土器が出土した。（図版17g類土器）

h 類

串田新式土器　本遺跡からただの一点であるが、県内で串田新式と称せられる土器が出土している。出土地点は「二」地点に近く、表面は非常に磨滅している。（図版17 h類土器 拓本3ノ5）

土　製　品

滑車型耳飾

直径三糎、厚一糎、孔の直径一糎の黒色糸巻型の耳飾。内側には現在朱塗料が残って美麗である。（図版17滑車型耳飾 実測2滑車型耳飾）

六、本遺跡周辺の遺跡遺物

次に天神山遺跡の周辺の遺跡について述べる。そしてそれらとの関係に於いて本遺跡の縄文文化に於ける時期的な位置や、価値等について考察してみたい。

本遺跡の周辺のうねうねと起伏する丘陵上には、縄文文化の遺跡地が多い。未知の遺跡もまだまだあるだろうが、現在判明しているものだけでも、東方五〇〇米に吉兵衛平、同じく一粁に中山、北方一粁に観音平、さらに桜峠（東方二粁）、黒沢（東方三・五粁）、嘉例沢（東方九粁）、福平（東方七粁）、石垣（南方三粁）、上野（南方六粁）、田家野（西北方三粁）、枕野（北東五粁）、海岸には魚津埋没林（西南方五粁）等一〇指にあまる遺跡があり、その数からして遺跡の豊富な地帯と言える。（附図1天神山遺跡及び附近関係図参照）

それぞれかつての調査によれば、

桜　峠

魚津市長引野背後の台地、海抜一五〇米で天神山より東方二粁の地である。精巧で各種の石質で作られた美しい石鏃、石匙が多く出土し、磨製打製石斧、石棒、環石、石槍、石錐、丸玉、曲玉等出土し、土器としては、中期土器を主とし、非常に珍しい早期の撚型文土器が出土している。

黒　沢

魚津市黒沢の水田、海抜一四〇米で、天神山より東方三・五粁にある。石鏃、石棒、磨製打製石斧、石皿等、土器は、主として後期晩期のもので、僅かながら、縄文中期土器及び須恵器が出土している。

吉兵衛平

魚津市東山背後畑地、海抜一三〇米で天神山の東方一粁にある。縄文前期の絡縄文らしきもの及び後期のものを出土する。

中　山

天神山の東方五〇〇米、海抜一〇〇米の地である縄文後期の土器が出土している。

田　家　野

黒部市田家野（天神山西北方三粁）海抜一〇米の水田用水路から出土する。土器としては後期、晩期のものを出す。

なお、用水路上の台地には中期の土器の散布地がある。出土品には石器―磨製打製石斧、大石棒、石錘、石冠、砥石、石皿、凹石、石鏃、石錐、石剣、装身具

土器―中期、後期、晩期

土製品—土錘、紡錘車型土製品、球形土製品、滑車型耳飾

石　垣

魚津市石垣（天神山より片貝川を隔てて南方三粁の台地上）海抜一五〇米の水田中より出土し、石剣、石棒、石冠、独鈷石、石匙、石鏃、石斧及び縄文中期及び後期の土器、土偶、注口土器等を出土する。朱塗りのものもある。

上　野

魚津市上野（天神山より片貝川を隔てて南方六粁）海抜七五米の水田丘陵上である。石剣、石冠、石錐、石鏃、石槍、石斧、石棒、玉類及び中期の土器を出土する。

魚津埋没林

魚津市漁港海岸（天神山の西南五粁）にあり水面よりも低く、埋没林の根株の下に出土した。縄文後期の薄手のものが出土して、埋没林の絶対年代の有力な資料となつている。

其の他少数ながら、天神山周辺の丘陵上及び丘陵下の山林、畑地、水田中の随所から出土している。

かように天神山の周囲、半径五粁程の間に縄文文化の早期、前期、中期、後期、晩期と一連の時代を異にする石器、土器が多数出土している。これは縄文文化の最初から最後まで数千年にわたつて我等の祖先が継続的に生活していたことを物語るものである。

しかも桜峠の如きは、県下で他に福光町人母（ひとう）しか発見されない早期の楕円捺型文土器を出土しているのである。

その中で、天神山遺跡は出土遺物の種類、量共に最も豊富であり、遺跡の規模も大きく、土器も多様化し、文様もけんらん豪華な隆起彫刻文が多い。それは一般に縄文文化の中期のものともいわれているが、その器形文様は富山県内の同期の遺跡のそれに比して数段豪華精緻であることは最も特筆せねばならぬ。

斯様な点から考えて、天神山遺跡に生活した原始人はこの期の原始人の中でも豊富な生活内容の中に、芸術的天分にめぐまれた人達によつて生活が謳歌されていたものといえよう。

さらに縄文文化が次第に終末に近づき、晩期の頃となると、田家野や魚津埋没林の如く、次第に低地や海岸に近く居を占めるようになる。前期、中期の山林丘陵より、次第に海岸低地に移つていることは、この地のみにて独断的に決定するのは早計であるが、当時のすう勢を物語つている。これは食生活の変化や漁撈方法の進歩を物語るものであろうか。

土器も薄手小形、文様も単純なものが多くなつている。

七、結　語

富山県内でも最も著名な遺跡の一である天神山遺跡の解明は、今度の発掘によつて漸くその緒についたといえる。勿論天神山遺跡は一般に縄文文化の代表的中期遺跡として知られていることは前述の通りである。そして明治後半以来、先輩諸先生方の実地踏査が何度となく行われ、それ等の諸報告によつてその一端を窺うことが出来る。しかしそれは七、〇〇〇歩といわれる遺跡の一部であつて現在でさえ遺跡の広がりの末端の過半は不明である。従つて遺跡の内容は今回調査した遺物の時期のもののみかどうかも茲で明かにすることが出来ない。特に最近の考古学究明の速度にあわせて考える時、今回の発掘調査地点より僅かに距つた地点から、縄文文化中期の遺物とは申せ、その後のものと思われる遺物が出土したことを茲に明記しなければならない。註①

曽つてこの地を開墾したとき、附近の子供達がおはじきにして遊んだといわれる程たくさん散布し、採集された石鏃類は、現在では拾うことが出来ないどころか、原石さえ何処へ行つたかと思われるくらい少なくなつている。表面採集に於てこの様であり、しかも今度遺跡地の大部分が果樹園となり、今後一寸簡単に発掘調査が出来ないことになるとあれば、今回の発掘調査も大いに意義があるといわねばならない。

此度の発掘調査は昭和三二年五月、富山考古学会が酒詰仲男氏の指導のもとに行つた調査を基礎として行われた。従つて前回の調査によつて

1　縄文文化中期の単純遺跡である。
2　層位的な変化は見られない。
3　住居趾の存在が予想される。

の三点にしぼられる知見を更に確かめ、新しい考古学的探究を行つたものである。

以下今回の発掘調査の結果をとりまとめ、それに基いて二・三検討してみよう。

一、天神山遺跡は魚津市独立高地天神山の東山麓、舌状台地上にあり七、〇〇〇歩に及ぶ。

二、今回の発掘では層位的事実は全然認められなかつた。

三、炉趾が発見された。大きさは普通の大きさで、大小五箇の扁平棒状石で囲れ、大体矩形を呈していた。

また今回の発掘では住居趾に見られる粘土の踏みしめ、柱穴、或いは溝等の顕著な遺構は認められなかつた。勿論炉周辺の遺構の追跡は今後に期待される。

四、特記すべき自然遺物がなかつたが、地質学的に見て搬送したとしか考えられない長経五十糎程度の棒状石が、平面的に垂直的に不自然に出土している。

五、磨製打製石斧の比率は概ね半々。打製石斧は中形の短冊型が殆んどを占め、全長一二～三糎のものが多いことはこの期の遺物とその軌を同じうする。尚後期、晩期遺跡に多く出土する、半面が自然石の面を利用する打製石斧の割合が多いことは注目に値する。然もその中にばち型のものが一つあつた。

六、磨製石斧は所謂三味線胴の断面を示し、正矩形の断面のものは少

ない。

大きさは平均一〇糎前後の割合に小形で、頭部と刃部とが大体同じい巾をもち、石質は緑色を主とする美しい蛇文岩質であることはこの期のものに共通する。

七、石鏃は曽つて多数表面採集されたことは前述の通りであるが、今度の発掘では僅少で特記出来ない。

八、その他の石器としては、石錘が全般的に形が少さいのは、石錘の利用方法に関係するものだろうか。

九、土器は一般に大形で所謂厚手式土器と称せられてきたものである。文様の少ない粗製土器を別として、豪快、雄大の称号を呈しても何等恥じない文様をもつた土器は、これを大別して二つに分けることが出来よう。なお共通した点では

1　形は共に大体筒形か深鉢形で口縁の方が内彎しながら末広がりになつているものが多い。高さ一〇糎から五〇糎まで。

2　土器の色は淡黄色、或いは淡褐色で暗色のものは少ない。一般に土質は粗であるが焼きは硬い方である。雲母粉を含む。

3　文様は雄渾な隆帯文を主とし、文様をもつた土器は繁雑なくらい器面余すところなく文様を充塡する。

4　口縁部は平縁と朝顔形と相半ばする。

5　把手には怪異な立体装飾がつけられることがある。

6　文様は半截竹管で器面をなで、出来た断面半円形の肉厚帯の組合せで出来ている。この隆帯は平行して走り、或いは渦巻となり、或いは上下に、或いは口唇に平行に、自由に走行させながら、そこに調和ある格調をもたせている。但し、渦巻文様を多用しながら同心円文様はない。

7　器面全部に文様をつけるもの、頸部より上部に文様をつけるもの、口縁部に接してのみ文様をつけるもの等あるが、隆帯文を上部に、縄文を下部につけたのが普通である。

8　縄文は一般に粗で、単斜向、然も左下りのものが多い。羽状縄文、絡縄文は見られない。

9　底部は四点だけ上げ底が見られる。また底部の中央部を指圧して凹を作つたものもあるが、殆んど大分は平底である。また底部は一部の網代、すだれの圧痕をもつものを除き無文であつて、後期、晩期土器に見られる木葉痕のものはなかつた。

10　完全に無文の土器もある。皿型に多い。

以上が本遺跡出土土器の全般的な観察であるが、仔細に見れば次の二つの様式に別けることが出来る。

1　華麗な隆帯文とは申せ、a類土器は線のはこびは敢くまで澱むことなく、その点b類土器は多少の生硬なものが感じられる。

2　文様の基線、及び文様帯の区劃をなす隆帯には連続爪形文、若くはヘラによる擬連続爪形文をつけるが、前者はa類、後者はb類土器であつて文様の変遷を思わせる。

3　隆帯はa類、b類土器共に断面半円形をなすが、前記連続爪形文、擬連続爪形文の隆帯は、一般地文の隆帯より多少太く作られたものが多い。特にb類土器に於てその傾向が大である。

4　擬連続爪形文をもつ基線は、断面半円形と云うより頂部を圧して帯状を呈したものが多い。また地文より著しく高く太く作られることによつて、a類土器より厚手に感ぜられる。

5　a類土器には所謂蓮華文、小三角連続沈刻文をつけたものがあ

る。b類土器には文様の退化と思われる沈線文のものがあり、僅かに見られる綾杉文土器もこの部類に入るとみられる。

一〇、土偶は得られなかつたが、この期に見られる黒色素地に朱塗りの土製耳飾が出土した。

以上天神山遺跡並びに出土遺物について概観した。茲で今少しく本遺跡遺物の位置づけを試みたい。

天神山遺跡から出土する土器は、三〇年前には一般に厚手式土器と呼ばれたものであつて、対比される薄手式土器は出ていない。昭和初年から初まつた関東平野遺跡遺物の編年的究明は、全国的広がりとなり、昭和一〇年頃には一応体系的に完成せられたことは知られた事実である。註②

その中にあつて北陸地方の縄文土器の編年は、戦争中の停滞はさることながら、戦後飛躍的進歩をとげた。八幡一郎、酒詰仲男、江坂輝也、山内清男の諸先達の指導は、地方研究家の指針となり、地についた前進となつた。

特に山内清男氏の三度に亘る踏査は大きな推進力となつた。註③

そこでその成果の上にたつて天神山遺跡を眺めてみるとして、先ず富山県並びに周辺地方の編年表を挙げてみる。註④（附表）

この表によれば本遺跡の遺物は中期に属し、南関東では勝坂式に対比され、県内では氷見市朝日貝塚A点上層のもの、石川県では宇ノ気町上山田貝塚、新潟県では糸魚川市長者原遺跡のそれに対比するものとされる。この三遺跡は共に戦前より著名な遺跡であつて、夫々各県の代表的遺跡である。これ等の遺跡から出土する土器が厚手の土器であることから、曾つて北陸地方は厚手式土器ばかり出土する地方と思われた位であつた。この意味では天神山遺跡も一役買つていたのである。

（附表）

土器型式による編年表（能登　自然・文化・社会より）

型式＼地域	南関東	新潟	富山	石川
前期	花積下層式			
	関山式		極楽寺	
	黒浜式	苅羽	朝日C	福浦1
	諸磯a式			
	諸磯b式		蜆森	福浦2
	諸磯c式			福浦3
	十三菩提式	剣野E	朝日A下層	新保
中期	五領台式	劔野B	＋	新崎
	阿玉台式/勝坂式	長者原	朝日A上層	上山田
	加曽利E古式	塔崎	?	?
	加曽利E新式	＋	串田新	北塚/宇出津
後期	堀ノ内古式	三十稲場	＋	気屋
	堀ノ内新式	＋	＋	＋
	加曽利B古式	＋?	＋?	＋
	加曽利B中式			
	加曽利B新式			
	曽谷式			
	安行1式			
	安行2式			

（早期，晩期を除く）

然し考古学の進歩は科学的に一歩一歩進んで停るところをしらない。「漠然と長者ケ原式とか上山田式とか呼んでいる」ことに疑念を持ち「近く上山田貝塚出土品に再検討を加え」る必要を感ずるのも自然であり註⑤、ひすいの長者原遺跡の如きは数年前から大規模な発掘調査が行われて、現在の考古学の立場から見直されている。亦世界美術全集に登載された花瓶形土器を出土した朝日貝塚A点上層附近は、現在文化財保護法によつて指定を受けて調査は不可能であり、また、大正一三年六月、

文部省柴田常恵、田沢金吾両氏によつて発掘された時の資料は、その概ね半量は地元に帰されたが、戦時の疎開の際の困乱のために層位的関係は全く不明になつている。なお柴田、田沢両氏の報告も土器に関する限り見るべきものがなく註⑨、唯富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告註⑦にその一端を窺うに過ぎない。

その意味で本遺跡はその出土量といい、その遺跡の単純性からいつても、富山県内の標式として否、北陸地方の標式として採用されるには最も良き条件を具していると考えられる。

そこで本遺跡の遺物を編年の中に位置づけてみよう。

縄文文化の前期は朝日貝塚A点下層より出土する所謂みみず張りとかそうめん張り土器と称する土器を以て終りとなる。文様の基線に連続爪形文をつけることは、本遺跡a類土器に見られる通りであるが、その直径三粍の細い粘土をはりつけて文様とする。亦地文に細粘土をはりつけ、その上に直角にはりつける手法、或いは地文は櫛様のもので平行沈線を刻みつけ、その上に直角に細粘土をはりつける手法等があり、縄文と区劃する線には幾何学的直線を多用するのを特色とする。亦繊細流麗な曲線を用いることもあるが、時折本遺跡出土品に見られない同心円の文様を用いる。また頸以下は単方向の縄文で占むることが多いが、絡縄文と称する手法を用いることも最も大きな特色である。

尚、把手には比較的巨大なものがあり、また緻密な前記手法を用いていることは、中期文化に見られる様式化への素地をなしているものと考えられる。

これ等の手法のうち、引続き採用するものは採用し、捨象するものは捨象して中期文化が形成される。ここに九学会連合能登調査委員会は『能登　自然・文化・社会』に於て中期の初頭に新崎式を標定した。器厚八粍前後の暗赤褐色の土器で、胴部に所謂B字状文を施し、亦綾杉文、蓮華文、小三角連続刺突文を特色とするものである。尚口縁部の形に於ても普通の二等辺三角形の形をとらないで、不等整三角状を呈することも特異な点とする。そして隆起帯に連続爪形文を施すことが少なくなると規定している。

この新崎式の標定を富山県内の遺物に当てはめてみる。我々の直接試掘した福光町小林遺跡、砺波市福岡遺跡、或いは資料を調査した城端町示野遺跡、井波町ポンポン野遺跡、大沢野町春日遺跡等がその比較対照となる訳であるが、明確に新崎式と比定することが出来る遺跡は今の所見当らず、遺物個々については新崎式の特色を兼ねそなえたものが数多く出土している。

大体中期文化の生活環境は一部を除いて一貫してその内容は、大した変化がなかつたと考えられる。前期のそれより土器が豪華になり、文様が雄渾となり、石器の種類、数量が激増した。遺跡の規模も実に大きくなつている。そして住居の転移が殆ど行われず、引続き一か所に固定していたと考えられることは、中期文化の生活の豊かさと落ちつきを示すものであろう。

県内に於て新崎式に比定する土器で考えられることは

1　蓮華文、小三角連続刺突文が見られる。

2　土器の焼成充分、明褐色を呈し、文様は中期土器の中ではやや平板的な感じを与える。従つて器厚も平均して次の期より薄い感じがする。

3　綾杉文の施文には多少の疑問がある。或いは中期に一貫してあつ

たか亦はb類土器期に比定すべきかとも思われる。

4　胴部には半截竹管文の間げきは沈線格子文で埋める。

5　土器全体から受ける感じはa類土器に見られる様な文様のうるさはなく、おうような風格がある。

何れにしても中期の初頭には或る種の様式化、固定があつたと思われるが、県内ではその単純遺跡は見つかつていない。天神山遺跡に於てはこれ等の期のものが存在することは前述した通りであり、写真、図版に示された通りである。要するに天神山遺跡ではこの期のものの比重は極く小さい。

所でa類土器期に入ると様式化の頂点とも云うべき土器が作られる様になつたことは前述の通りである。即ち様式化の中に、その間に一点の渋滞も許さない気魄が感じとられる点がある。

これがb類土器期となると土器の文様構成の心構えが大分異つてくる。強調と簡素の二方向が現われ、基線は太くたくましく、地文は簡素の美を強調する様になる。その間文様が多少生硬となり、渦巻は渦巻としてもa類土器の様な流れる様な見事さはなくなる。全体より部分を強調するあまり、基線上に小突起をつけることもこの頃に行われた。半截竹管による隆帯に綾杉文の手法が行われ、或いは頂部を平たくしてヘラ様工具で擬爪形文を施文することもこの土器の特色である。文様が器全体に関連させて施文することがなくなり、小区劃を区切り独立した区劃文様となつた。a類土器とb類土器の連続爪形文、擬連続爪形文は土器によつて画然と区別出来ないものもある。即ち一土器に両手法を併用したものがあり、それはB類土器に編入すべきものであろう。

このa類、b類土器は県内中期遺跡には必らずと申してよい位に共存していることは、前記県内諸遺跡の調査によつて明かである。

斯くして次の時代に変化して行く。我々の知見では串田新式と呼ばれるものであるが、その間、あらゆる点で大きな変化が見られ、中期文化の時代の流れに一つの大きな断層が想像される。b類土器に見られる基線隆帯は広くなり、その上にアナダラ貝の背唇を連続してリズミカルに圧することによつて作られる擬縄文が主となる。地文は平面化し、太い直線沈刻を上下に、左右に平行させて施文としたり、楕円を描いたりする。また磨消縄文の手法がこの時を以て初めとする。土器は従前の巨大から次第に小形になり、器厚も薄く、焼成も不充分と見えて茶褐色の土器が多くなる。把手も退化したものとなり、後期の沈線文土器へと移つて行く。

県内では大門町串田新遺跡、高岡市高岡公園小竹藪遺跡、福光町宗守遺跡等は串田新式を主とする遺跡であるが、夫々多少なり共天神山遺跡出土の期のものが出土している。特に小竹藪遺跡は後期とのつながりに注目すべきものがあるが、天神山b類土器と串田新式土器の間を埋めると思われるものが現在の所わかつていない。

以上本遺跡は南関東に於ける阿玉台式の一部と、勝坂式、加曽利E古式を主とする土器を包含する遺跡と考えられる。

註①　縄文文化中期の終末期に相当する。関東地方では加曽E利式、富山県では串田新式と称せられるもの。小杉高等学校『富山県射水郡櫛田村串田新遺跡調査報告書』昭和二七年

註②　各氏の報告がある。ここでは東京人類学会編『日本民族』のうち八幡一郎氏「日本石器時代文化」昭和一〇年

註③　九学会連合能登調査委員会『能登　自然・文化・社会』昭和三〇年の先史文化より。

註④　前記『能登　自然・文化・社会』富山考古学会『大境』昭和二六年に詳しい。

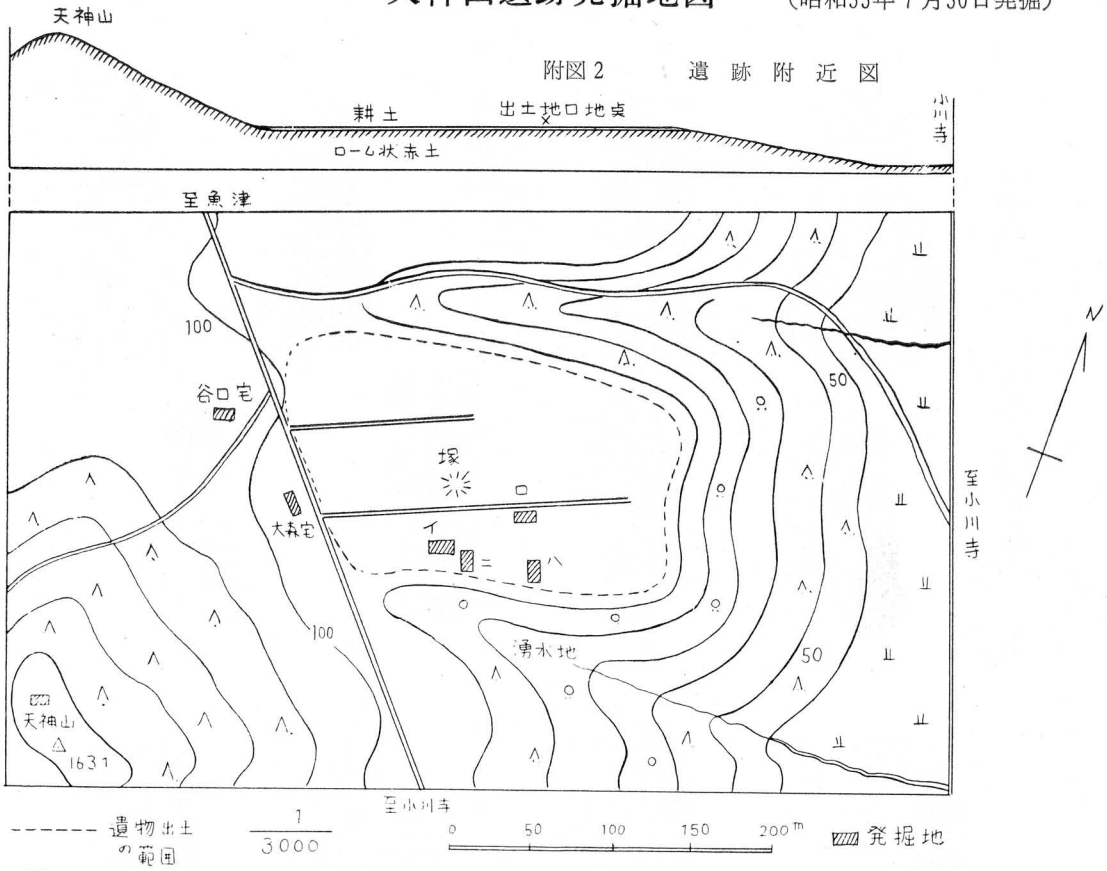
註⑤　前記『能登　自然・文化・社会』より

註⑥　柴田常恵氏、大場盤雄氏「先史時代の住居趾」昭和二年

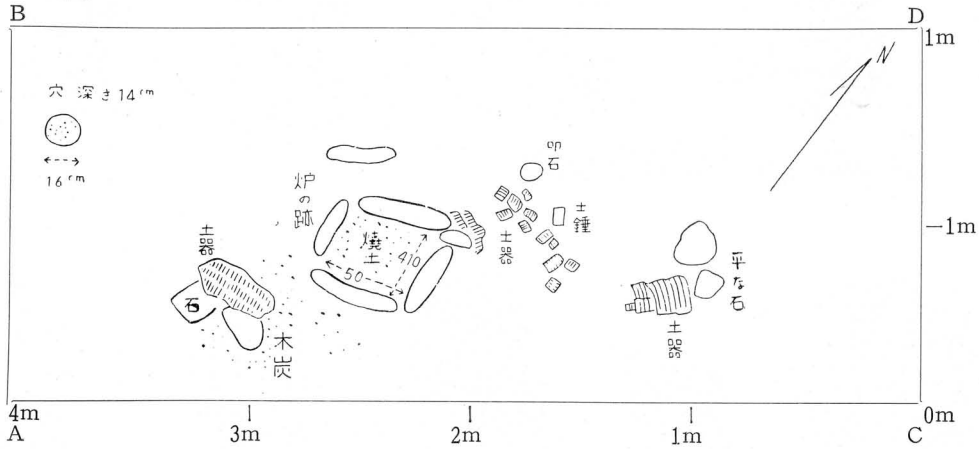
註⑦　『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第六巻大正十三年、大村正之氏、林喜太郎氏「氷見郡氷見町朝日貝塚」より

天神山遺跡発掘地図　（昭和33年7月30日発掘）

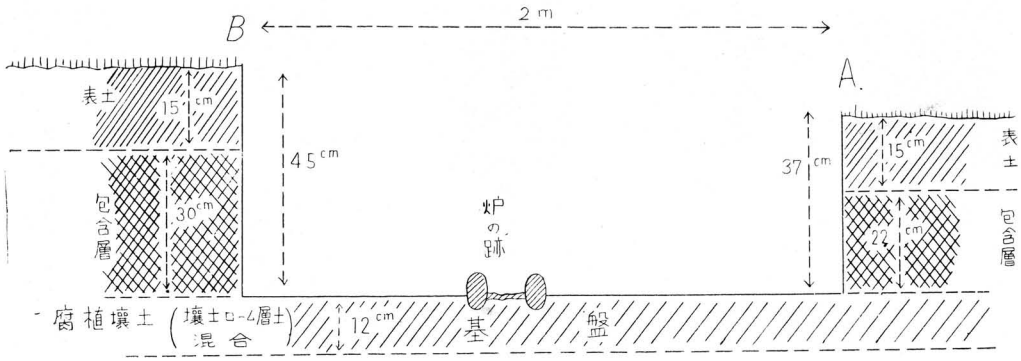
附図2　遺跡附近図



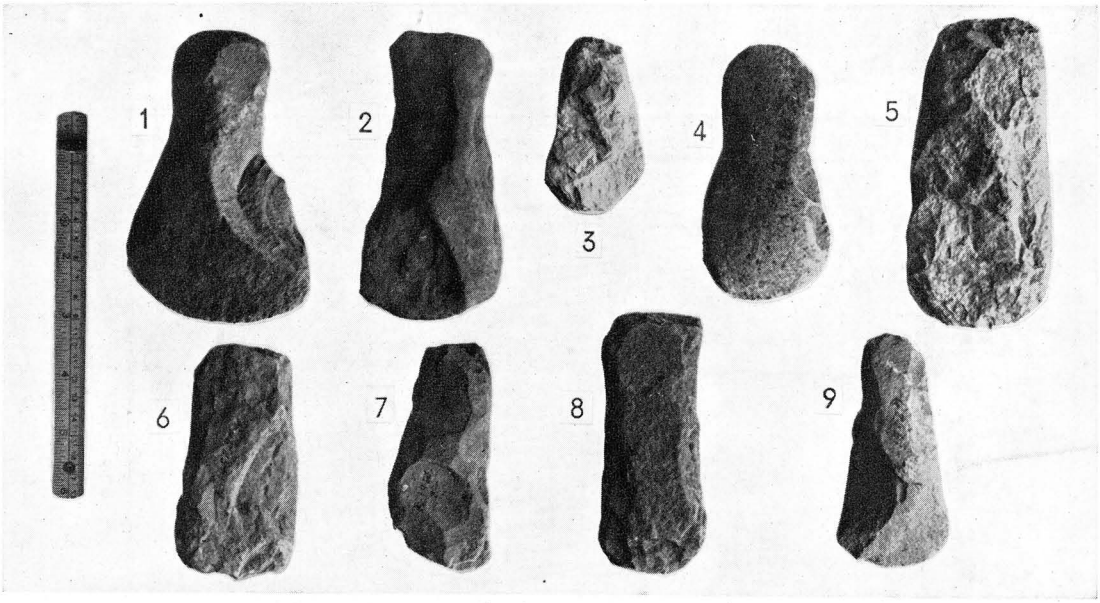
附図3　ロ地点平面図（基盤）



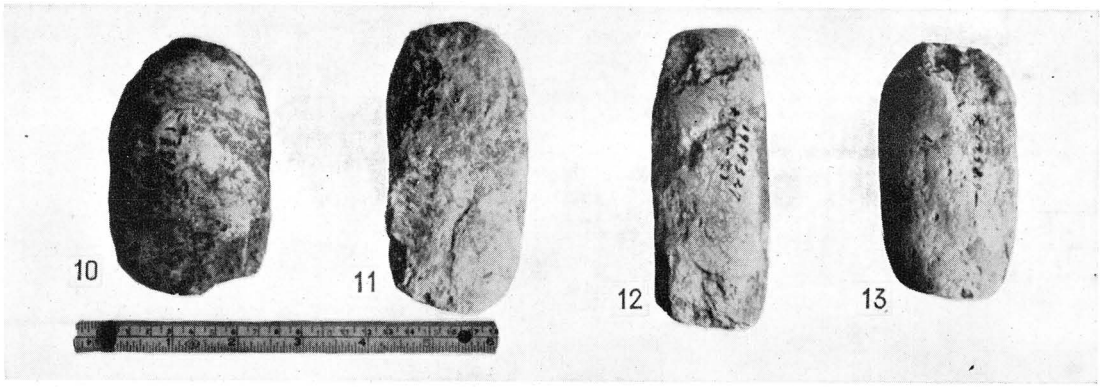
附図4　ロ地点断面図



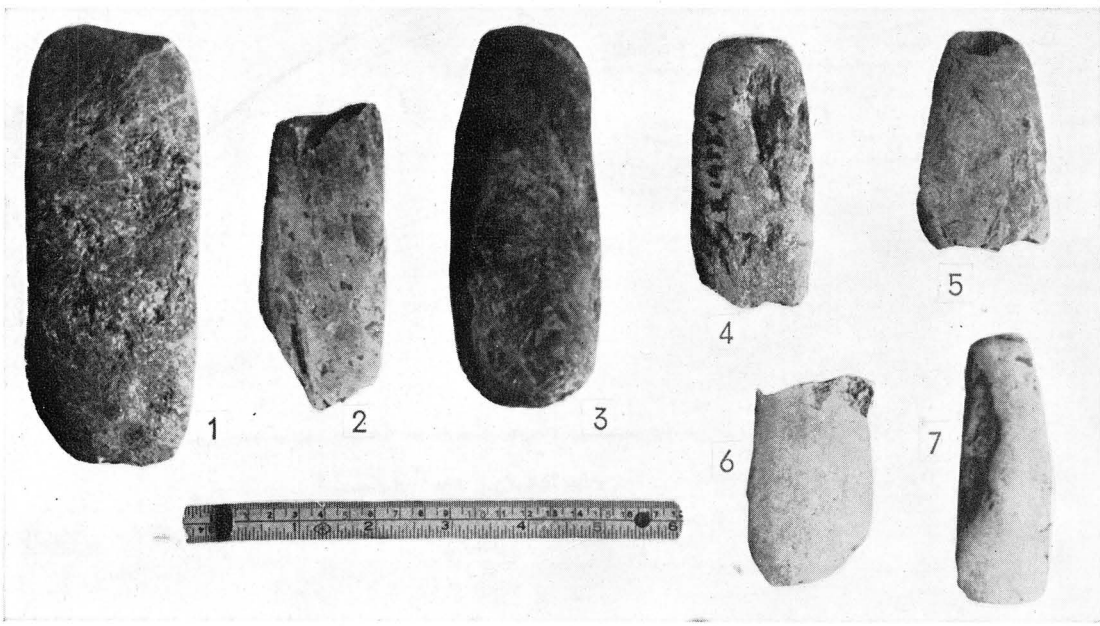
打製石斧



磨製石斧

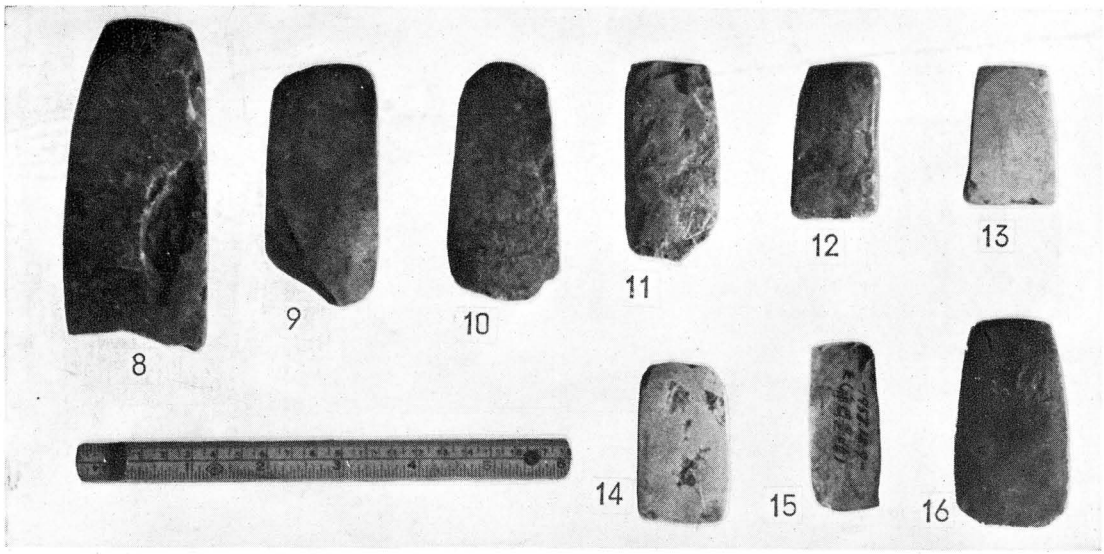


磨製石斧

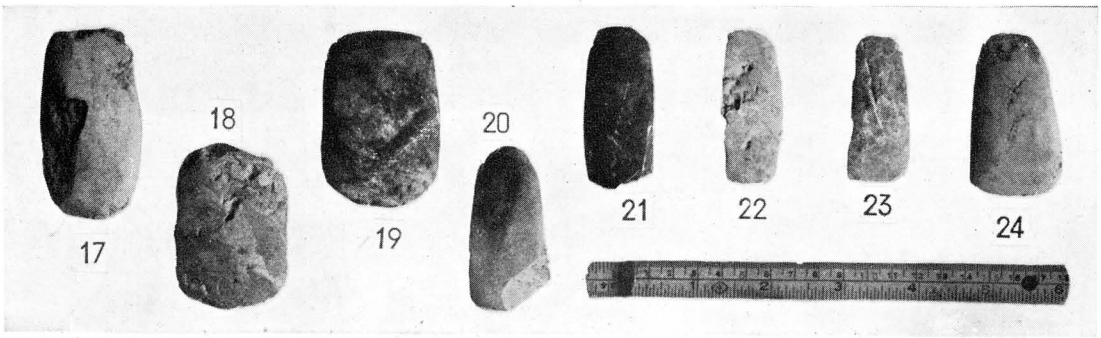


石　　器

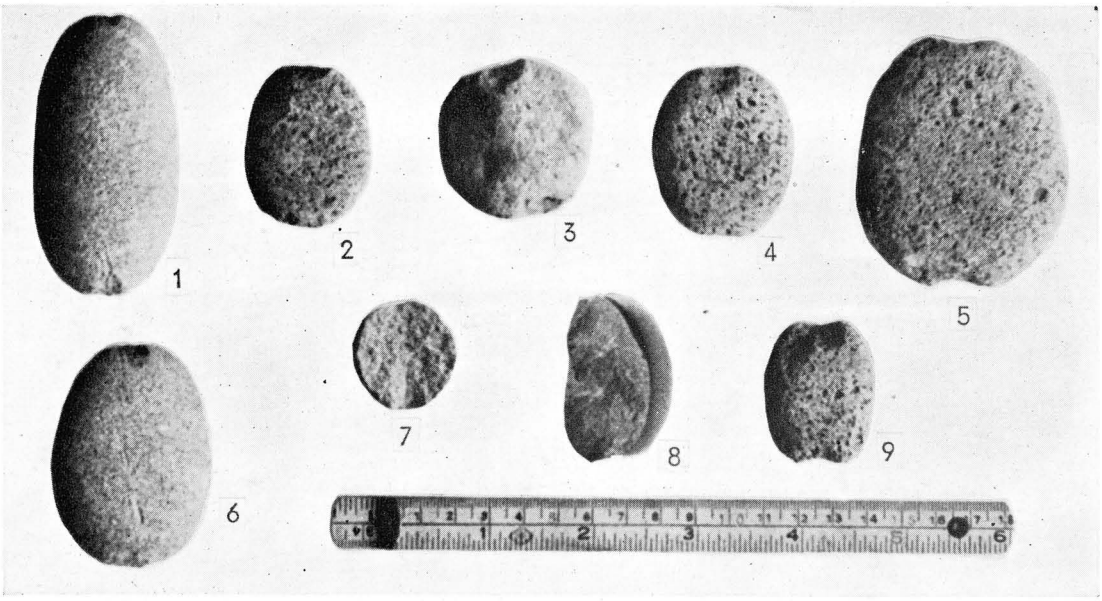
磨製石斧　　図版 11



磨製石斧



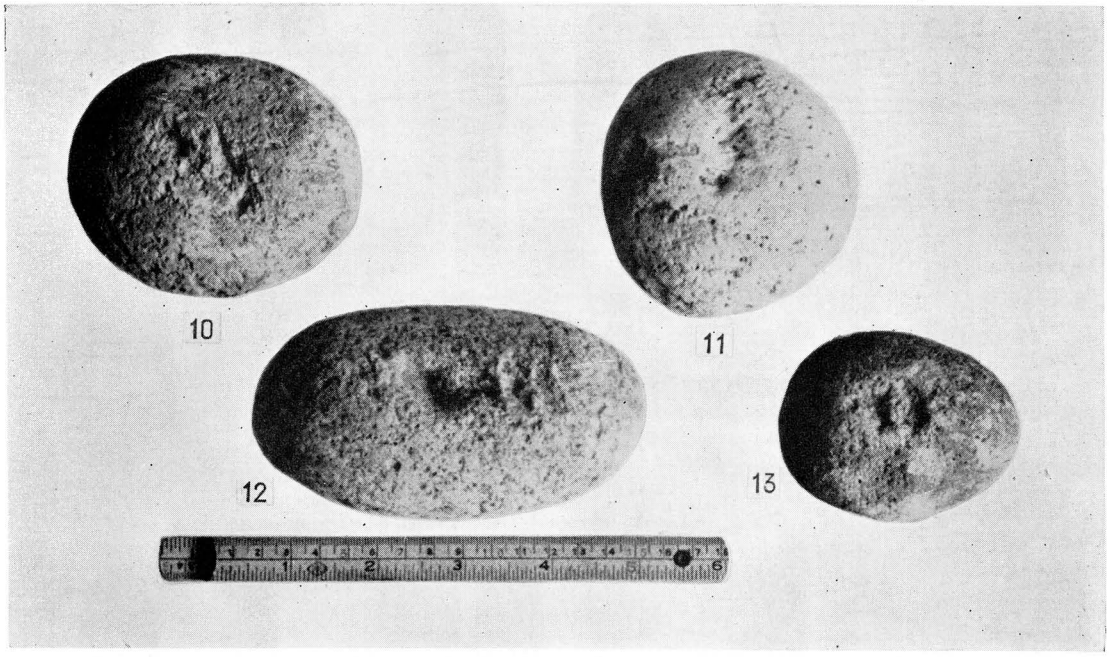
石　　錘



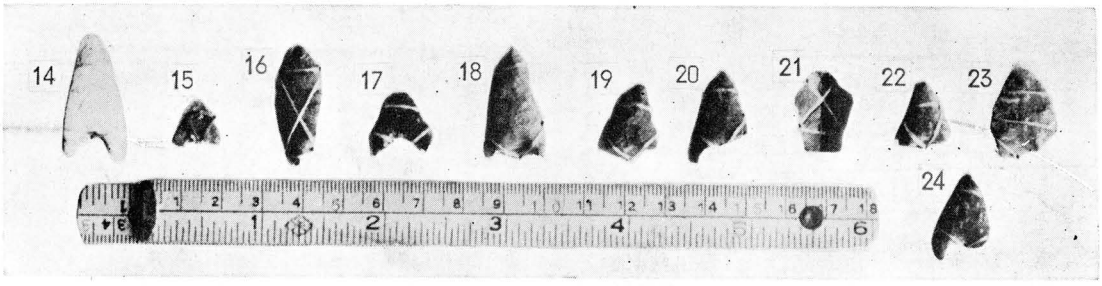
石　　器

凹　　石

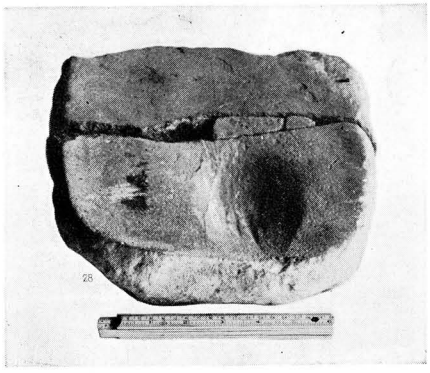
図版 12



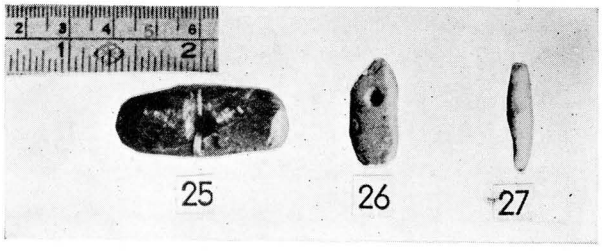
石　　鏃



砥　　石



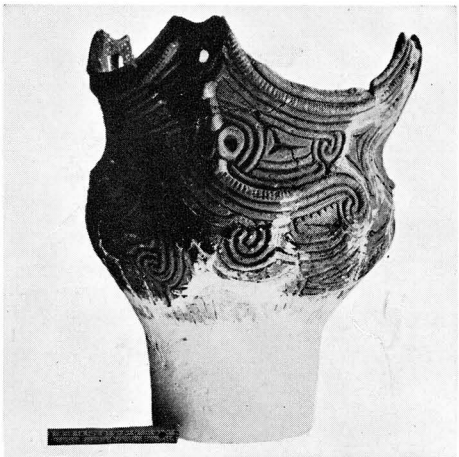
有孔石器

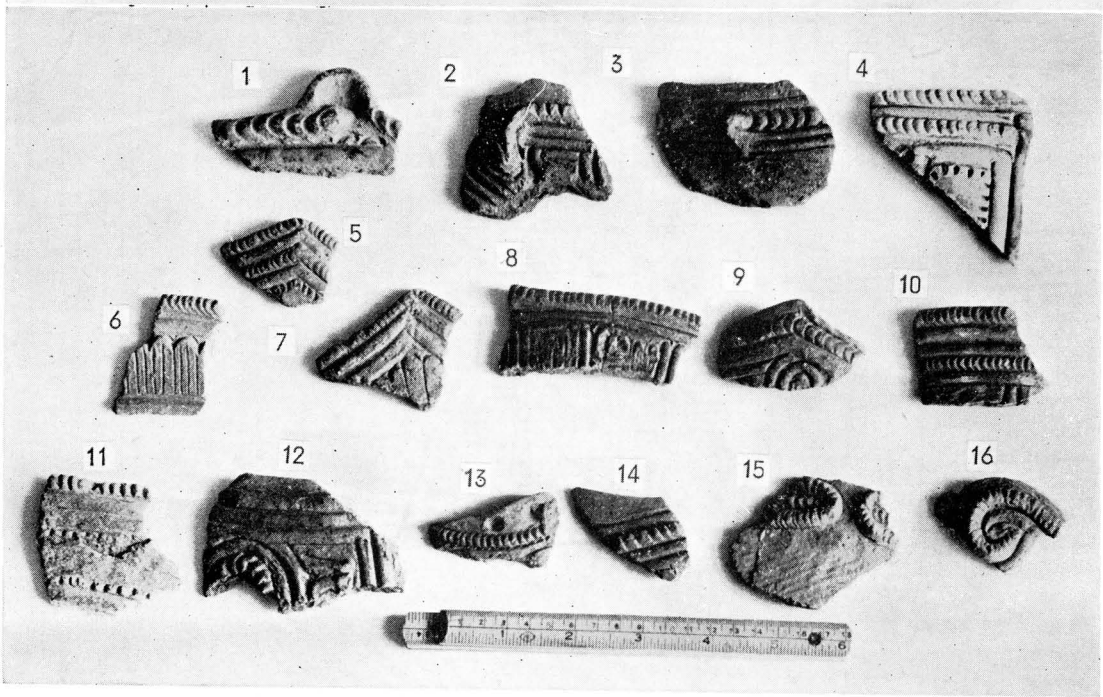


土　　器

a 類 土 器

図版 13





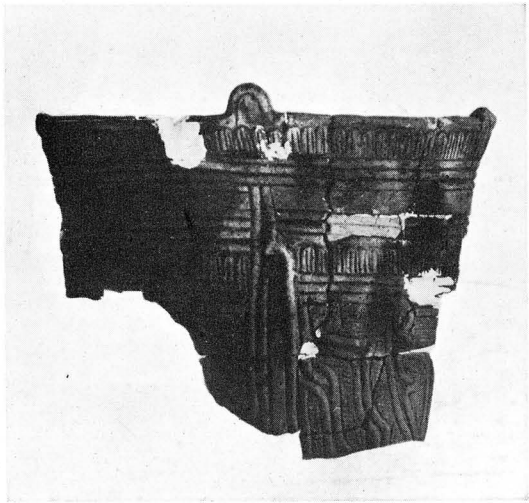
（内4はC類土器）

土　　器

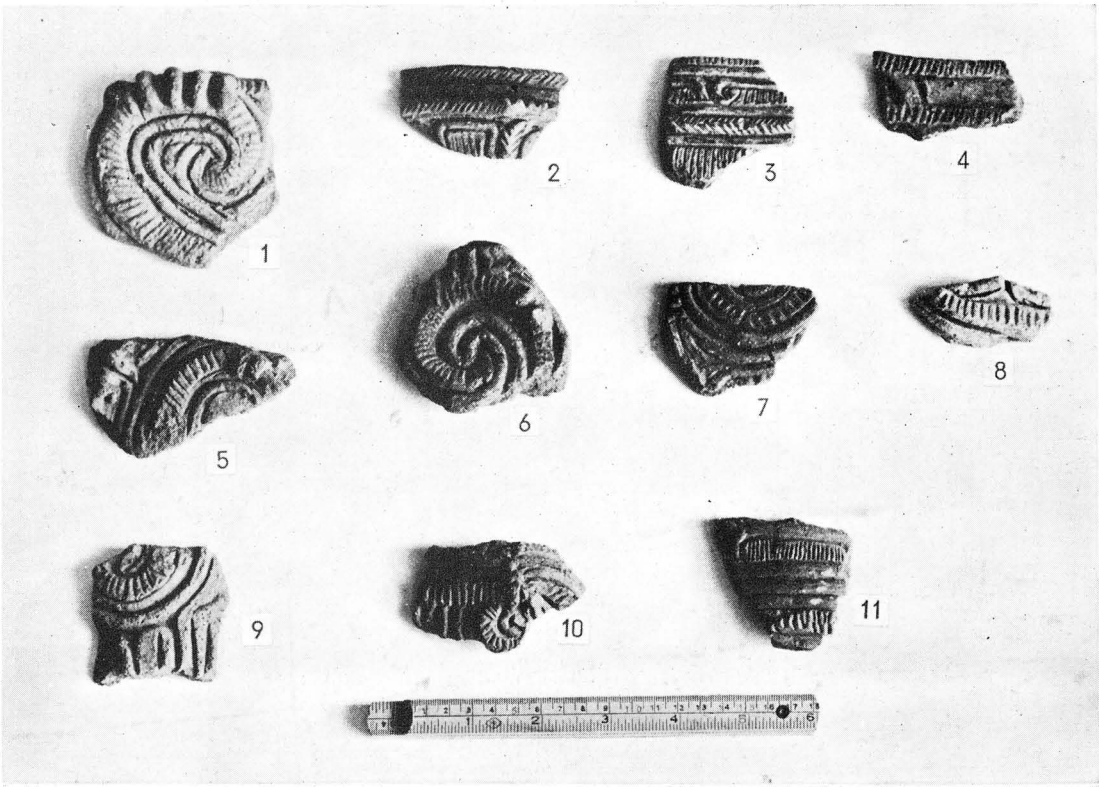
図版 14

b 類 土 器

e 類 土 器

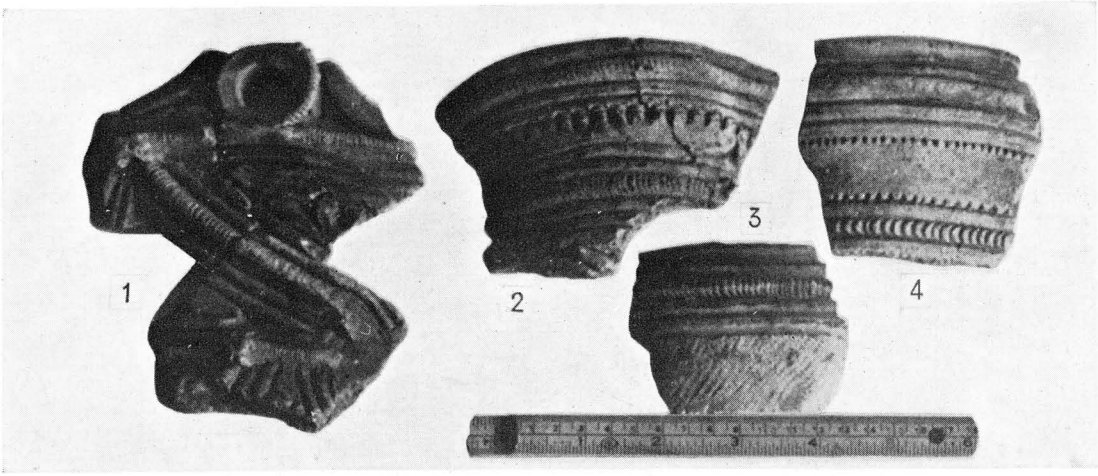


b 類 土 器

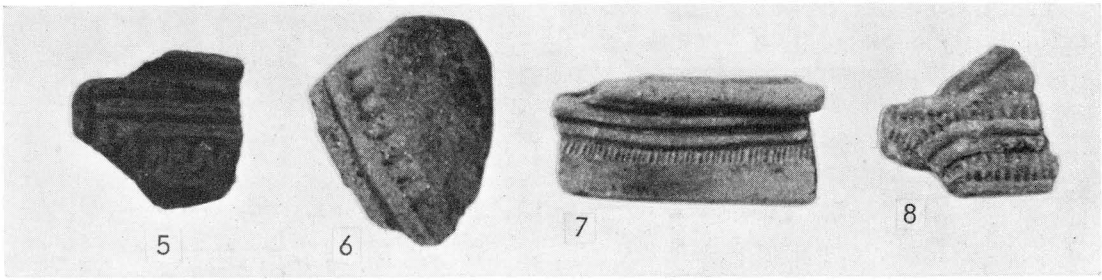


土　　器

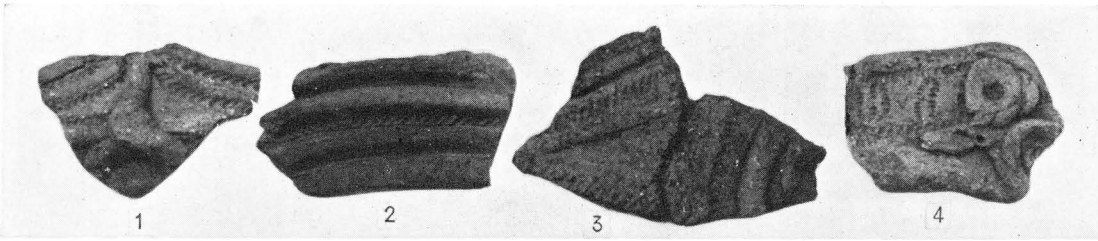
a 類 土 器（1．3）　c 類 土 器（2．4）　図版 15



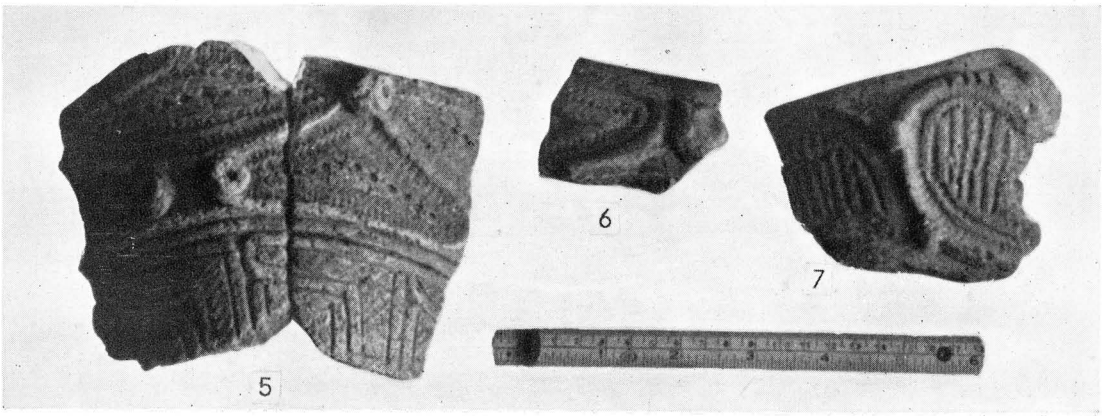
c 類 土 器



d 類 土 器

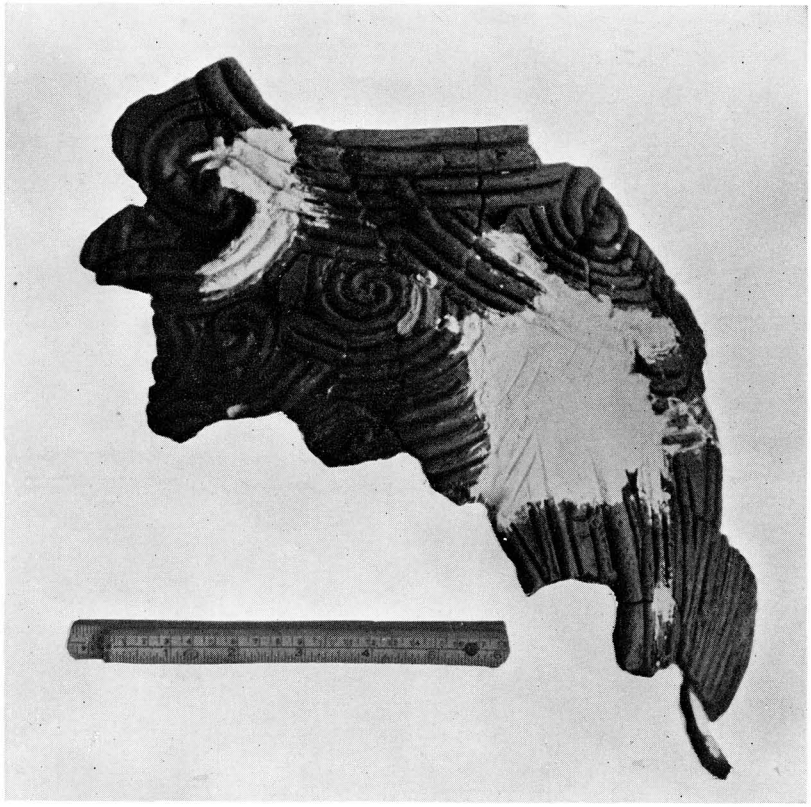


d 類 土 器

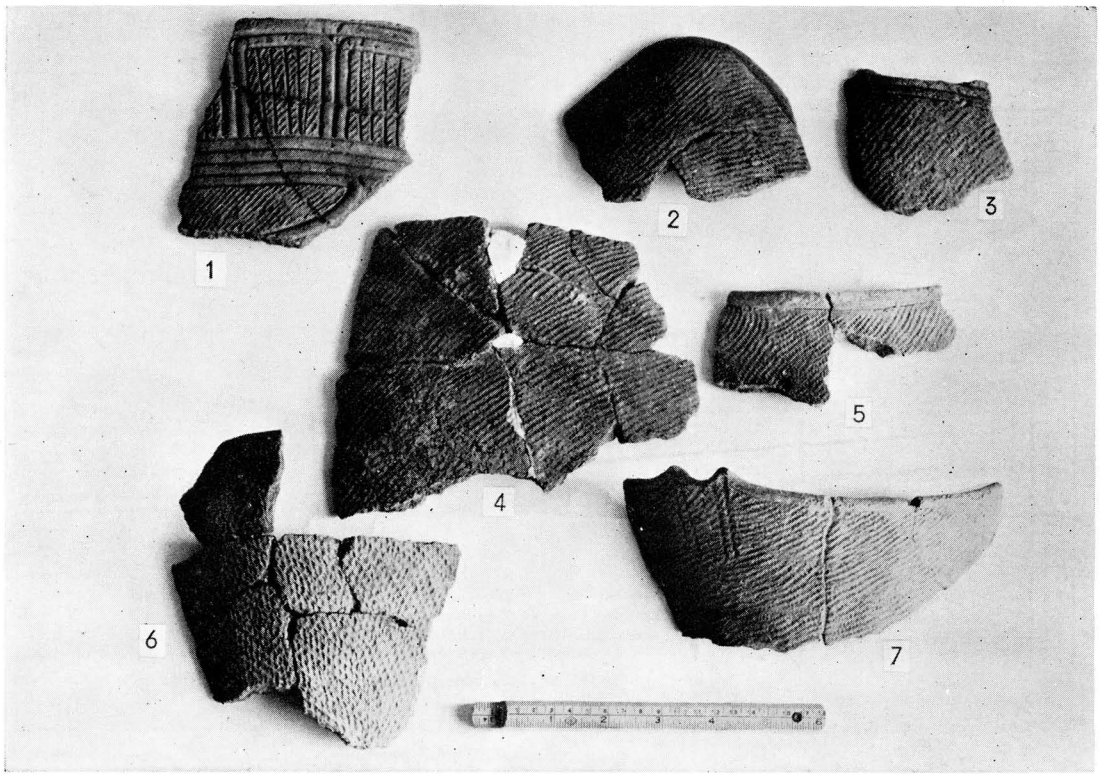


土　　器

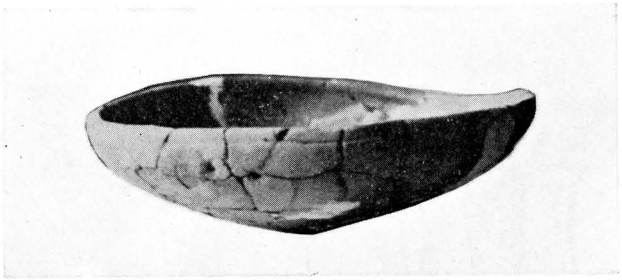
e 類 土 器



f 類 土 器

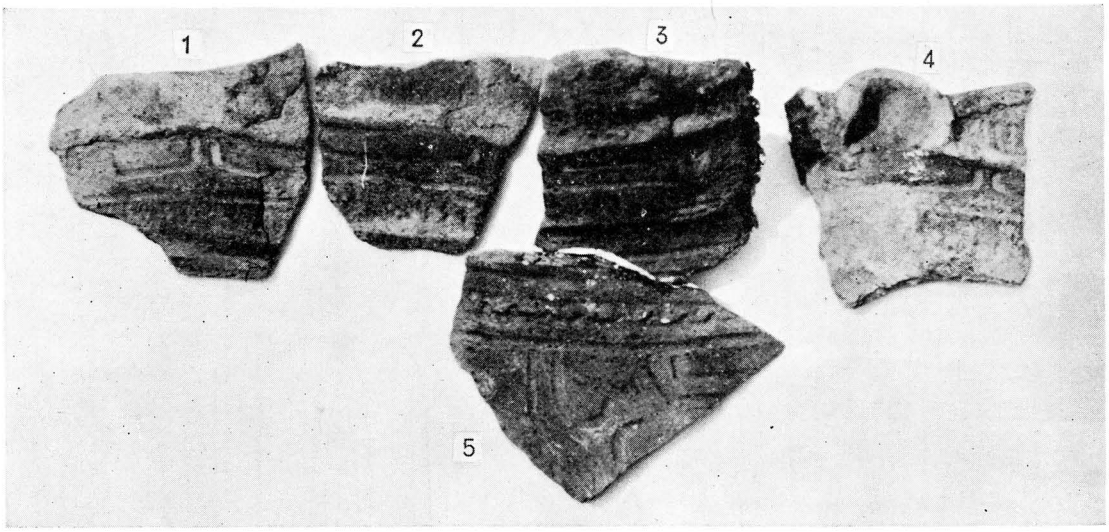


g 類 土 器　　土　　器　　図版 1.

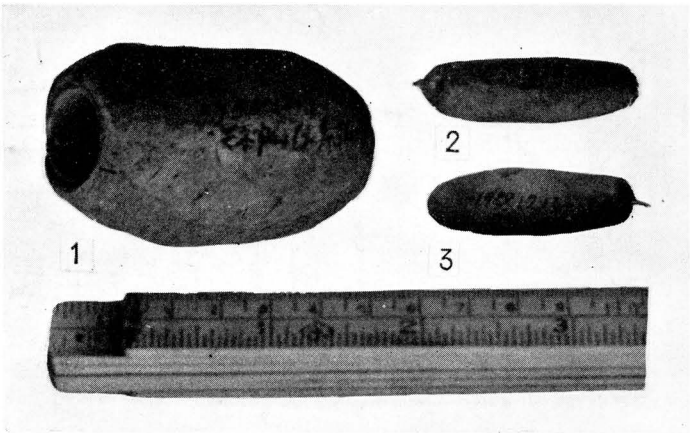


50×10cm (d×h)

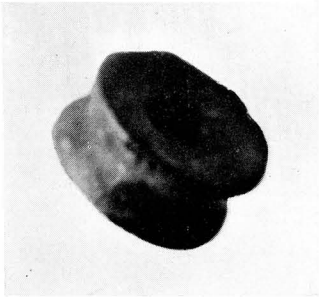
h 類 土 器



土　　錘

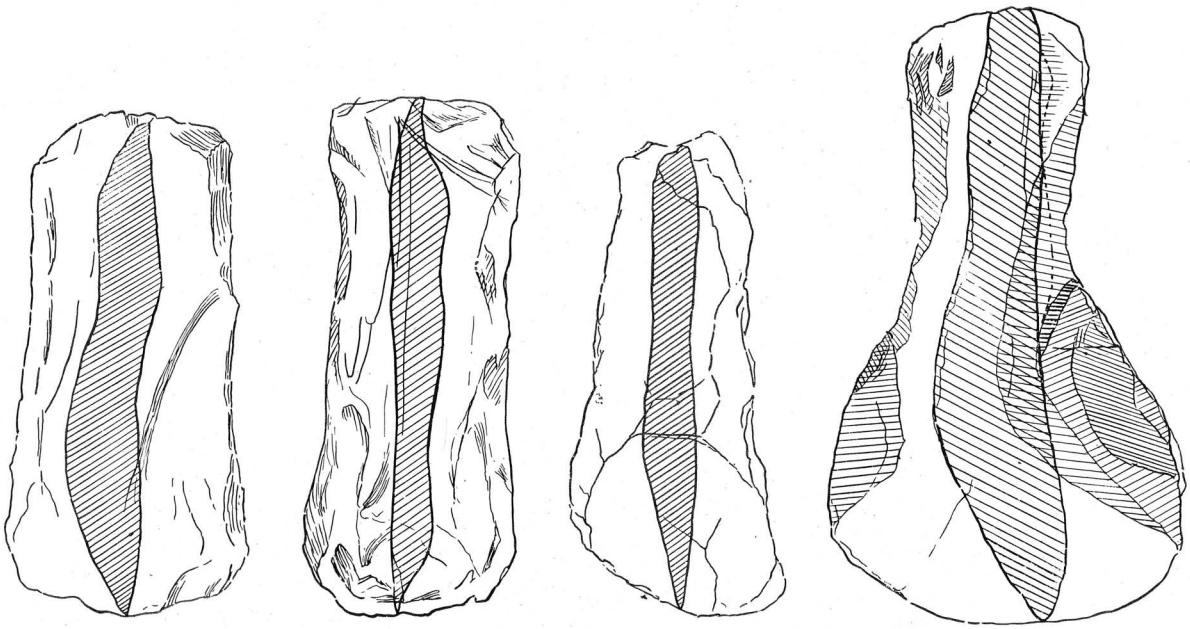


滑 車 型
耳 飾



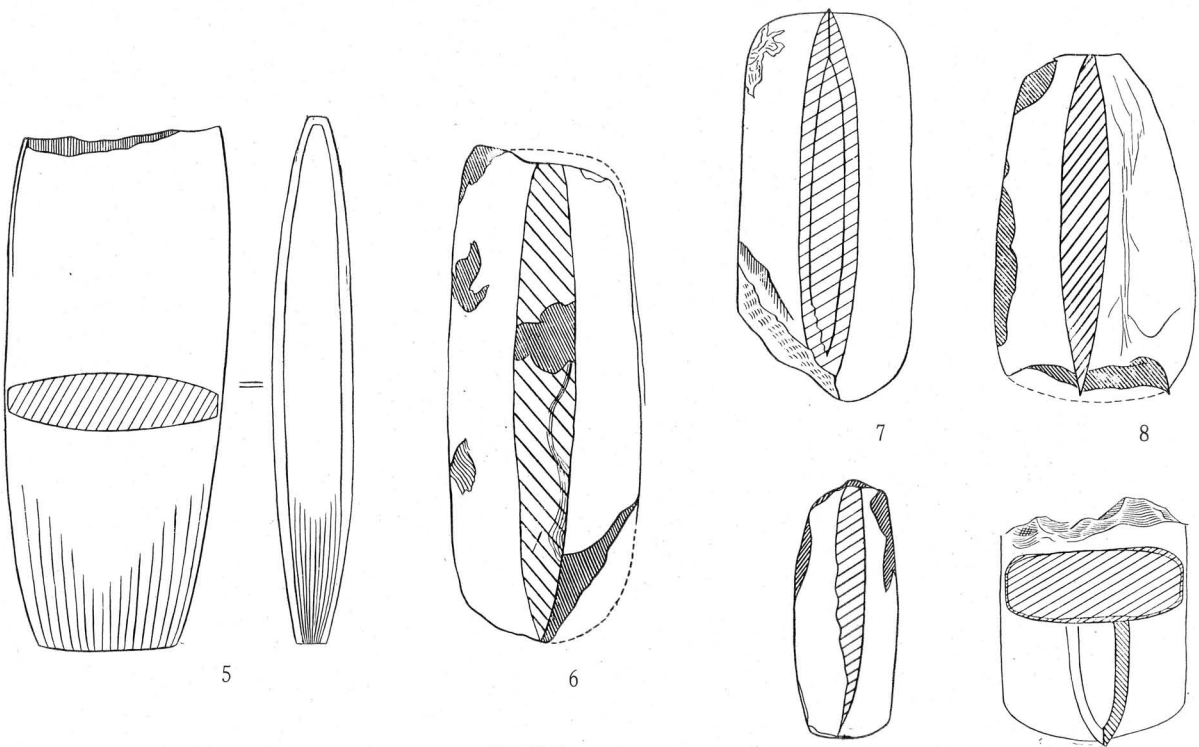
実　測　図　1

打製石斧



1　2　3　4

磨製石斧

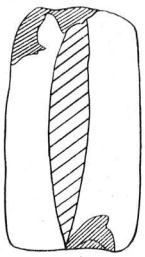


5　6　7　8　9　10

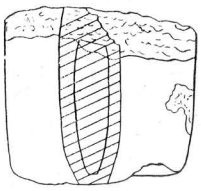
(縮尺½)

実　測　図　2

磨製石斧

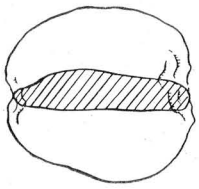


1

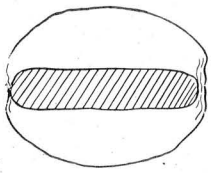


2

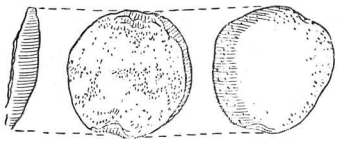
石　錘



3

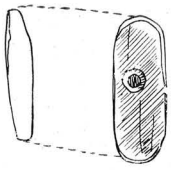


4



5

有孔石器

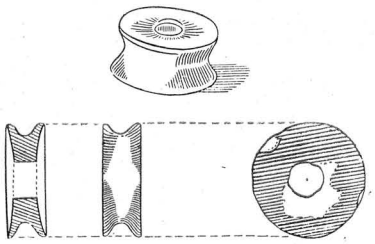


6

石　鏃

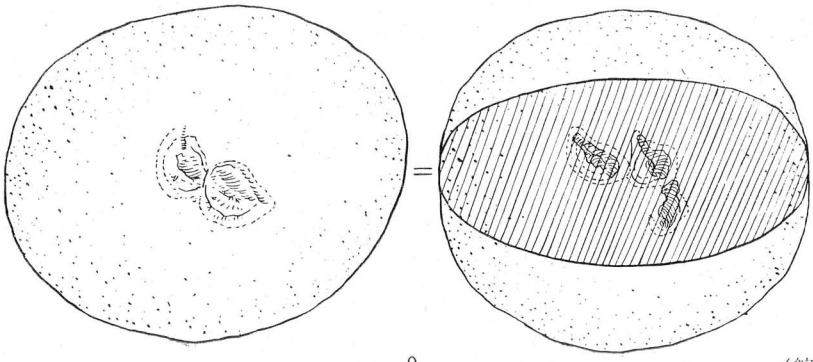
7

滑車型耳飾



8

凹　石

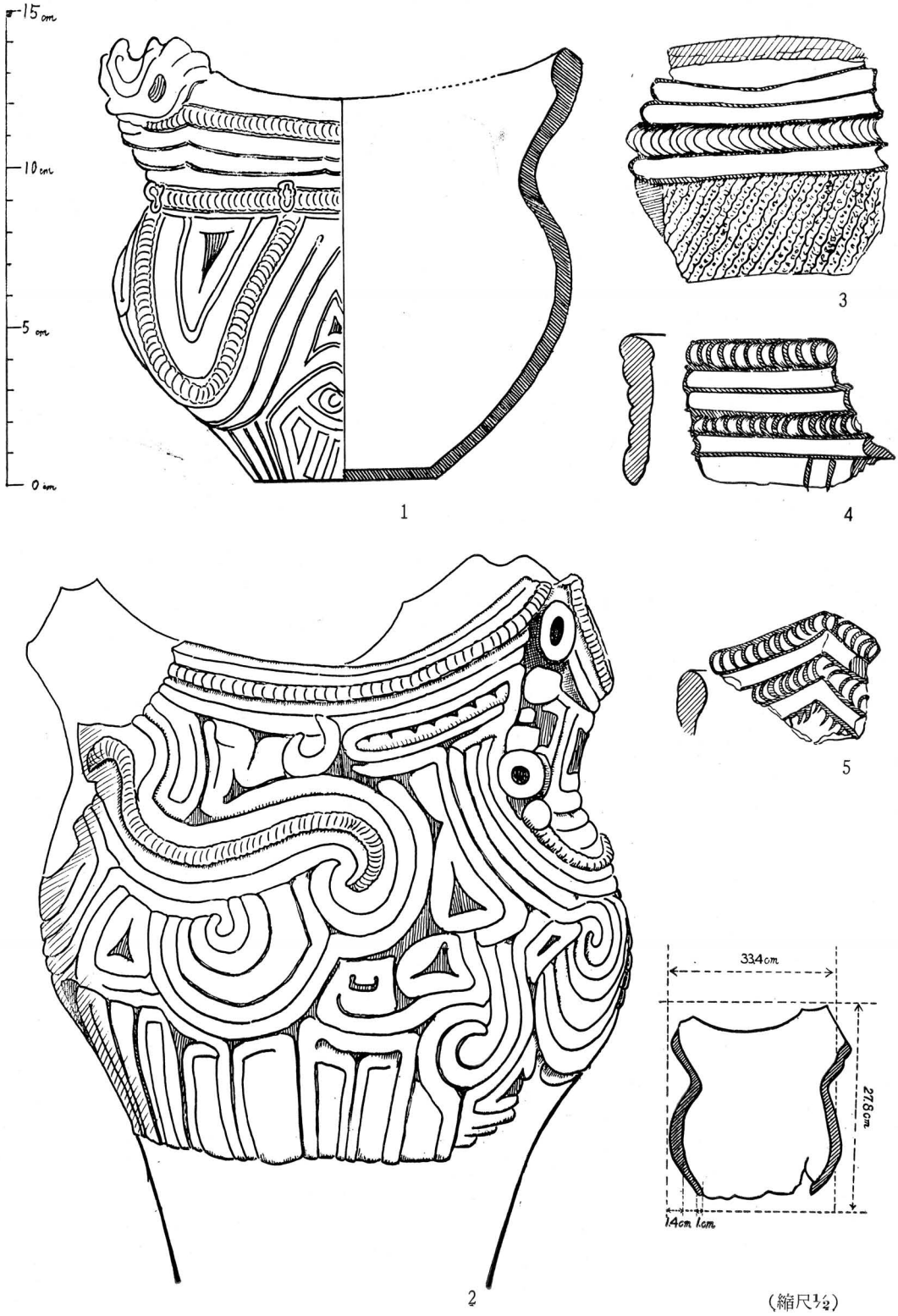


9

(縮尺½)

実　測　図　3

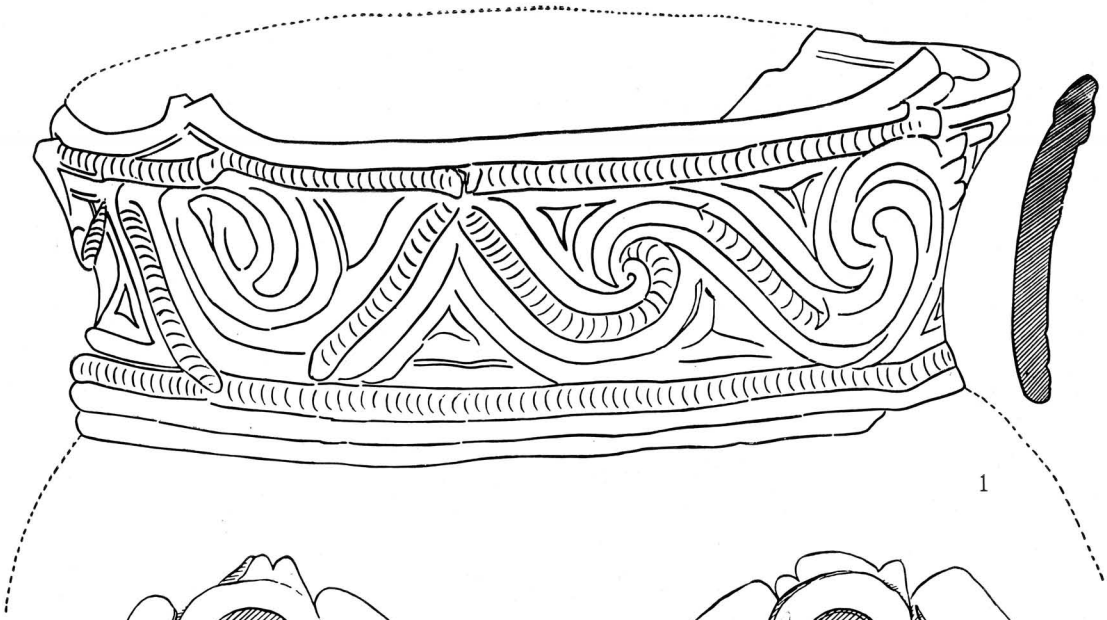
a 類 土 器



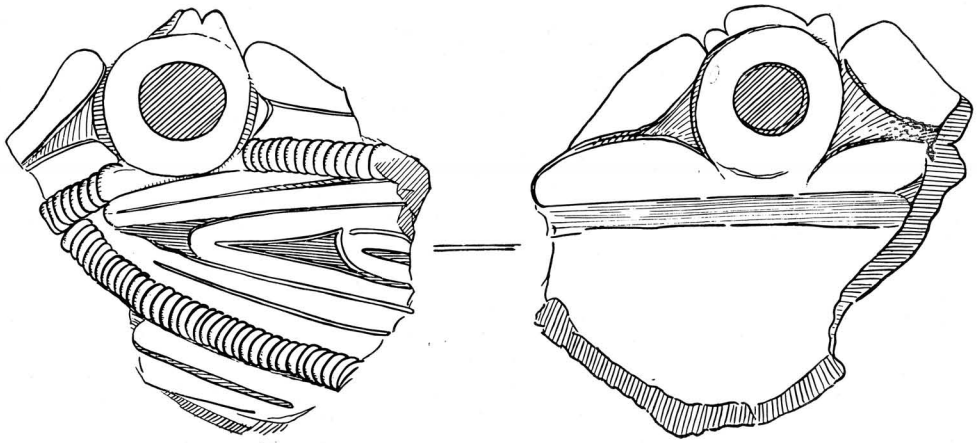
(縮尺½)

実　測　図　4

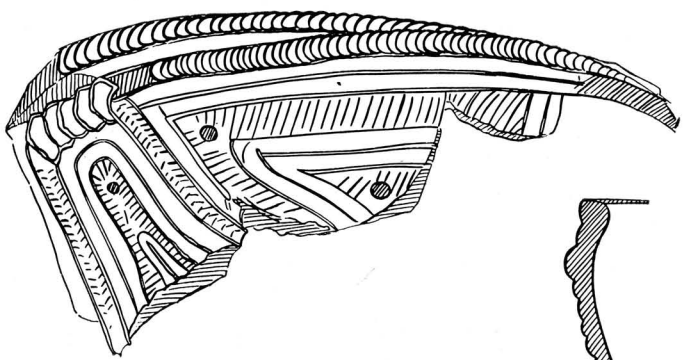
a 類 土 器



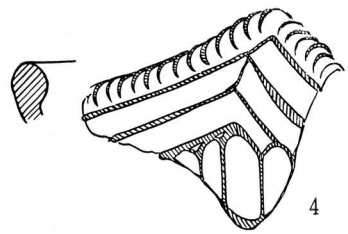
1



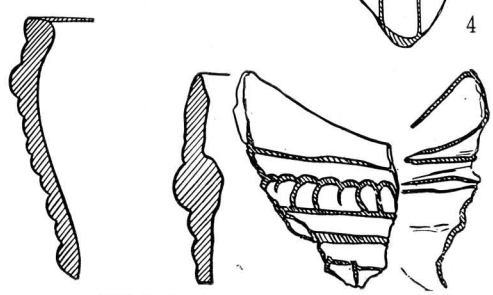
2



3



4

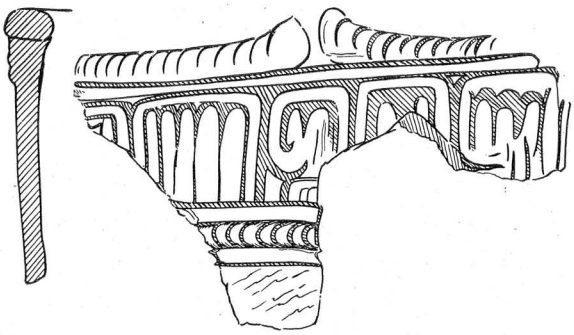


5

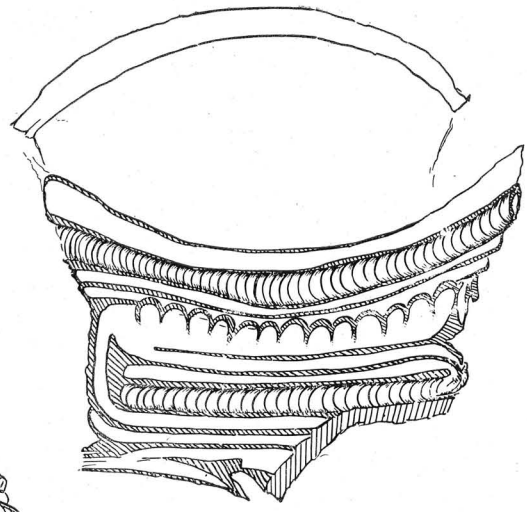
（縮尺½）

実　測　図　5

a 類 土 器

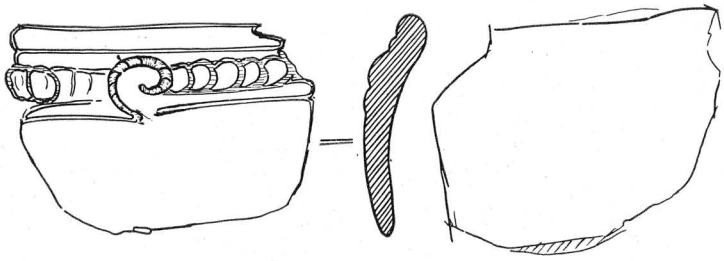


1



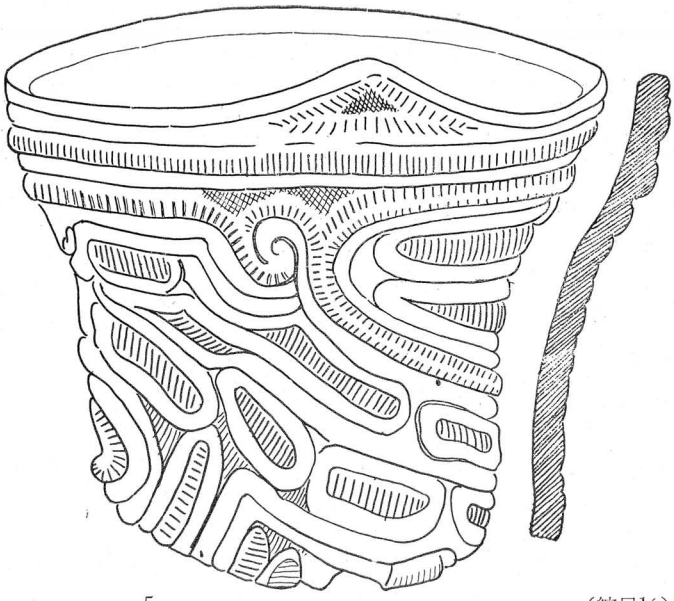
2

3
a 類 b 類
両手法が
見られる

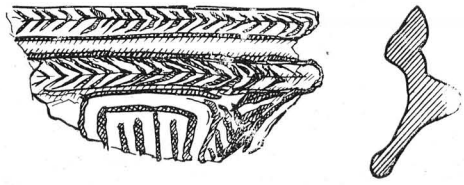


4

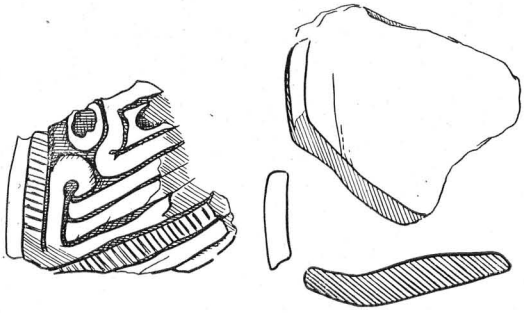
b 類 土 器



5



6

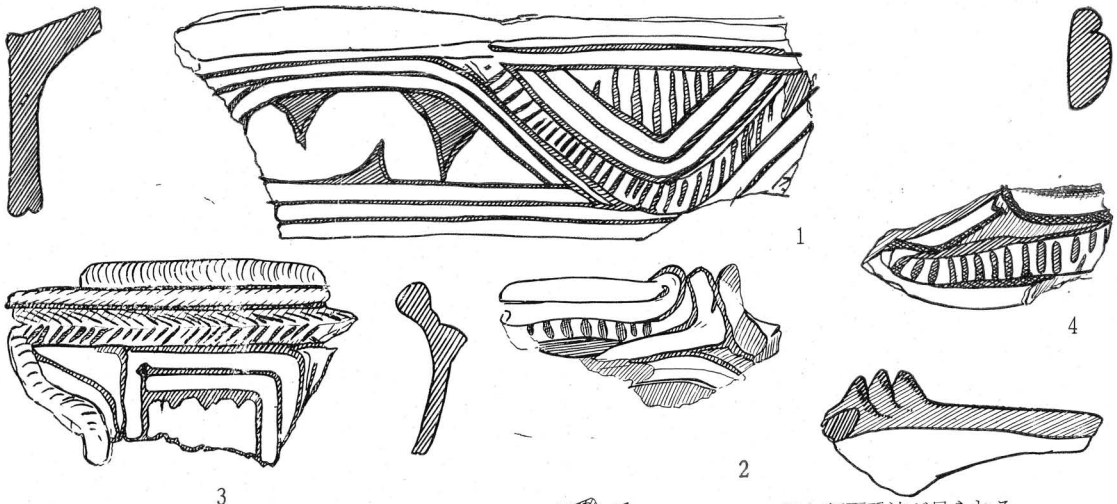


7

（縮尺½）

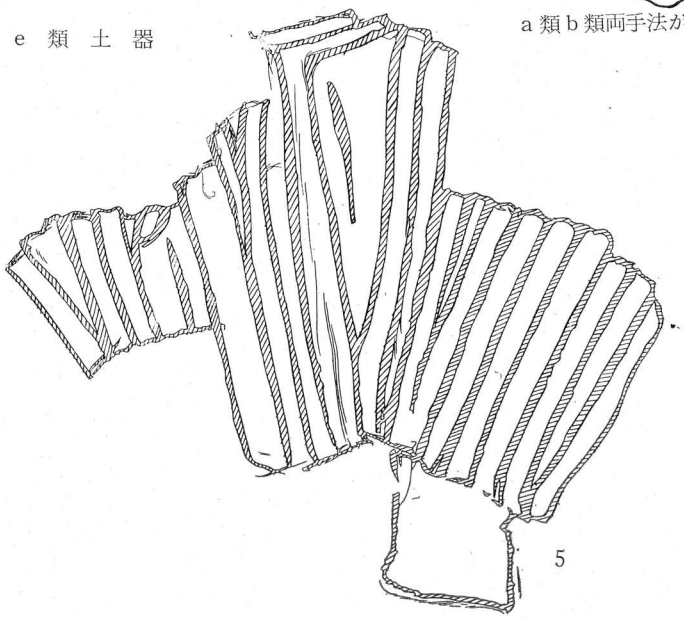
実　測　図　6

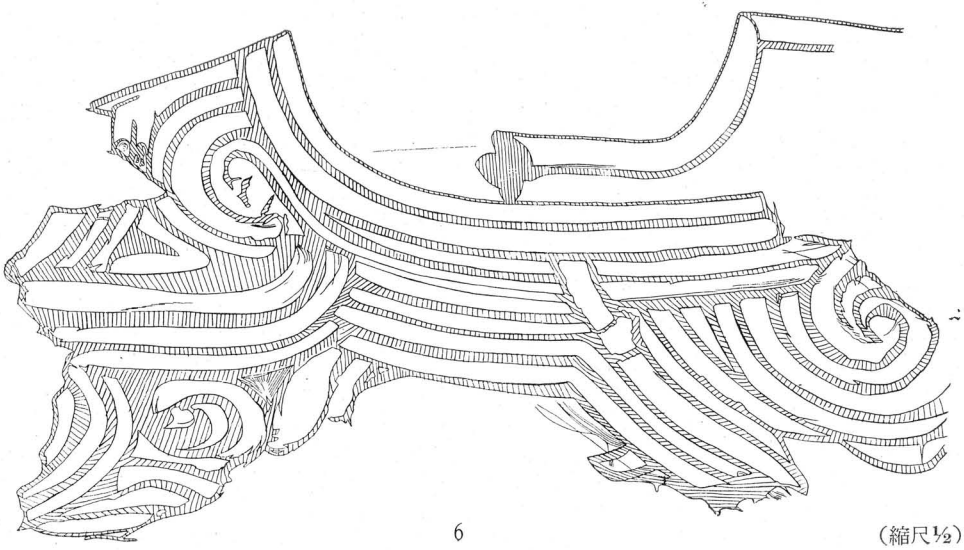
b 類 土 器



e 類 土 器

a 類 b 類両手法が見られる

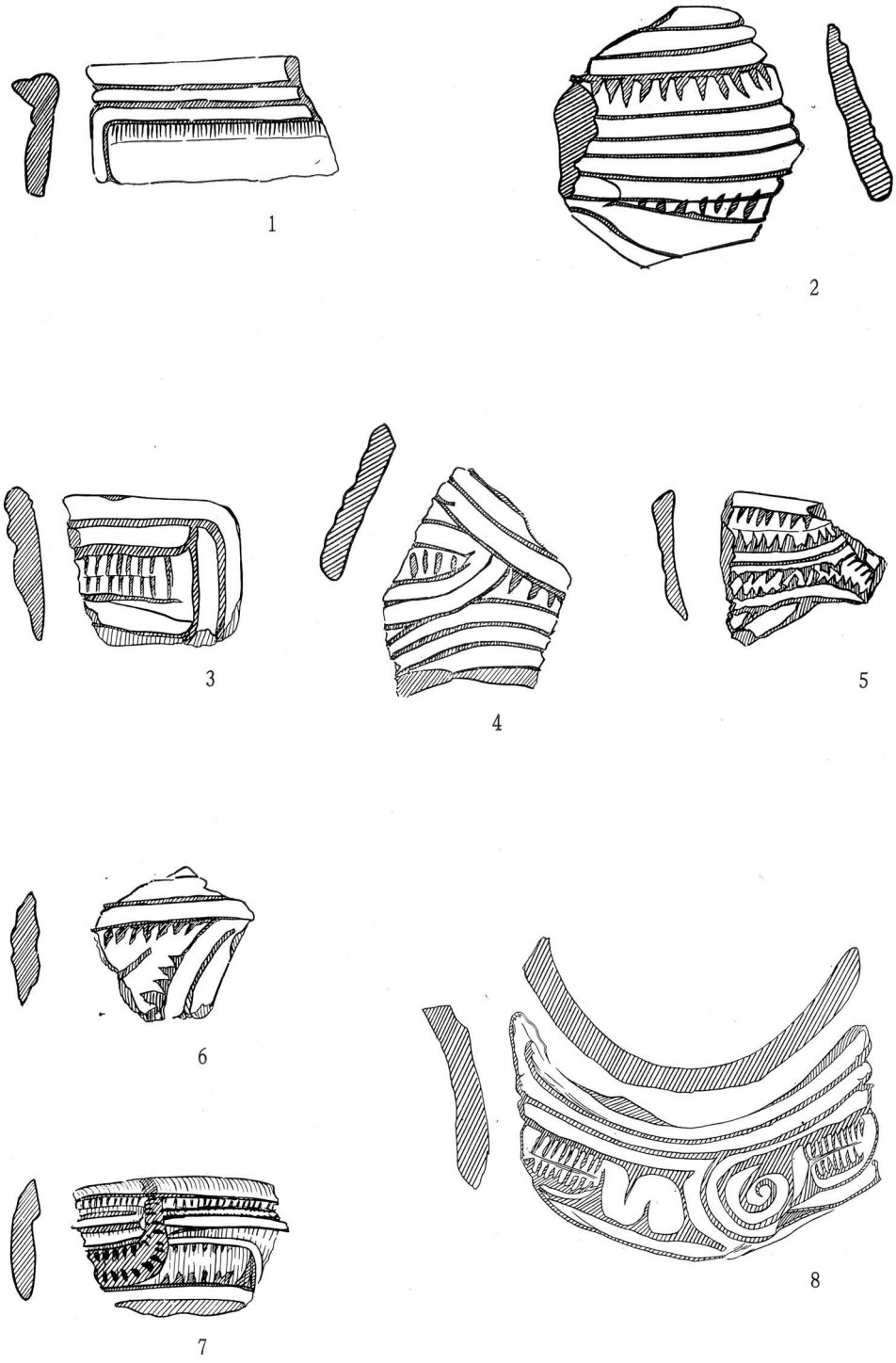




（縮尺½）

実　測　図　7

c 類 土 器

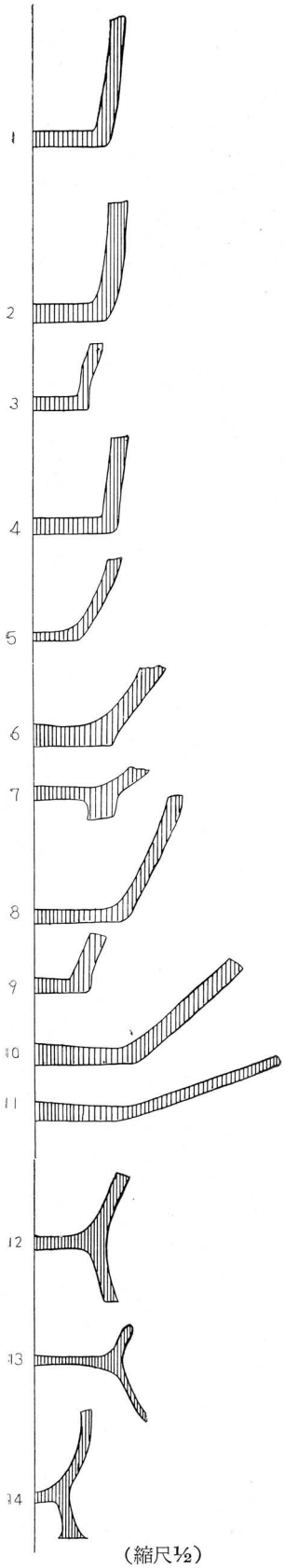


（縮尺½）

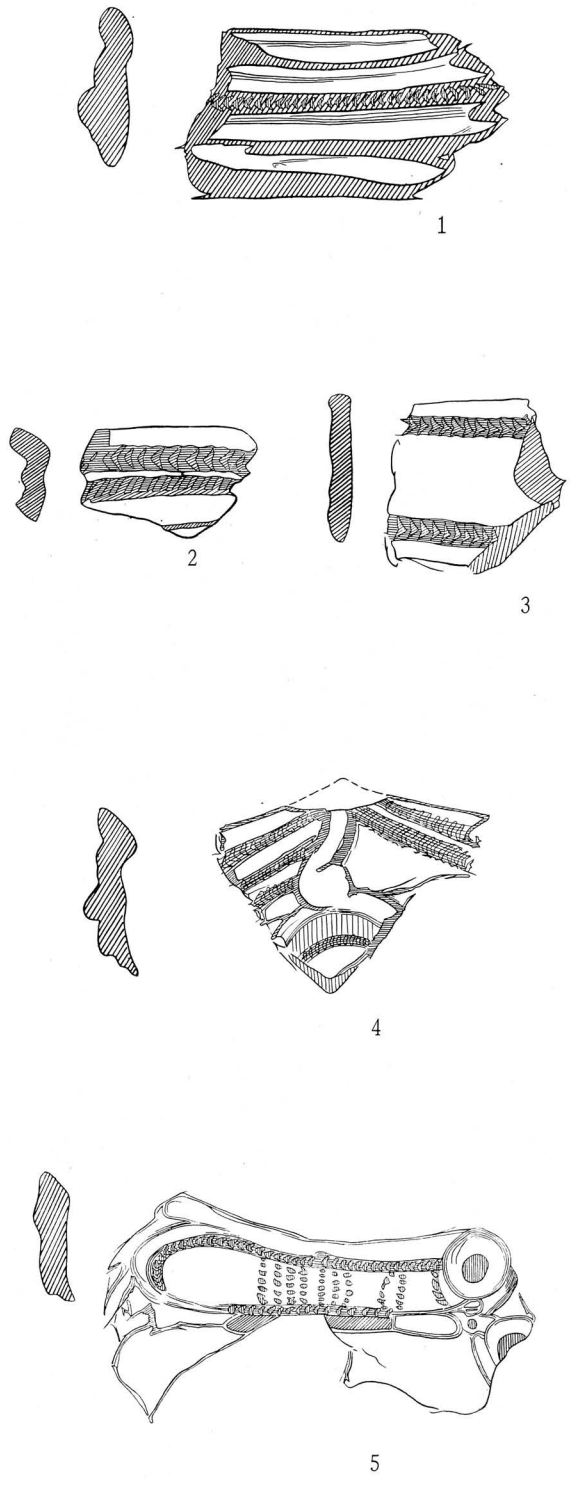
実　測　図　8

d 類 土 器

土器底部の分類



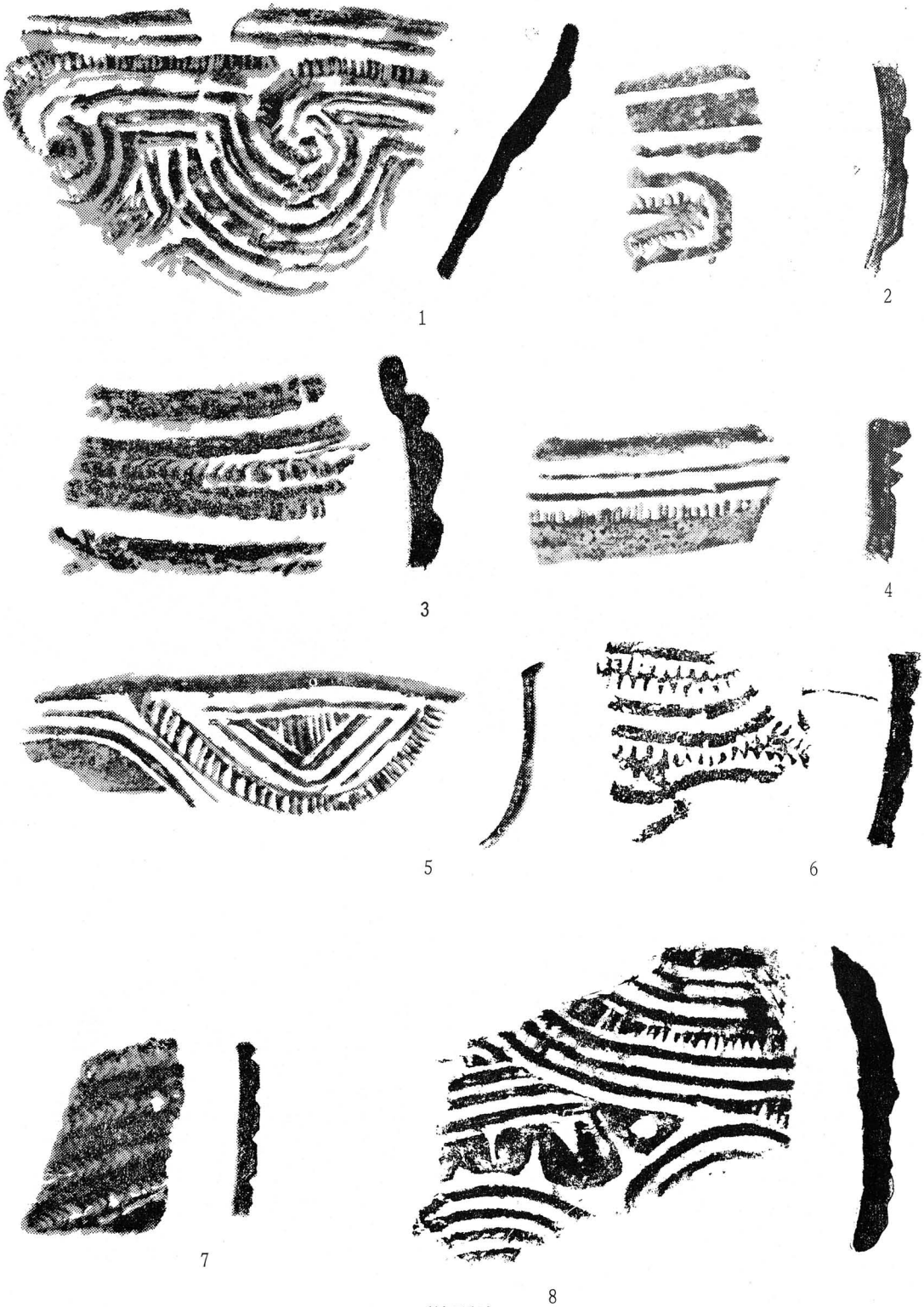
（縮尺½）



拓　　本　　1

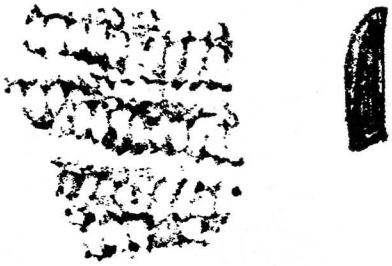
（縮尺½）

拓　本　2

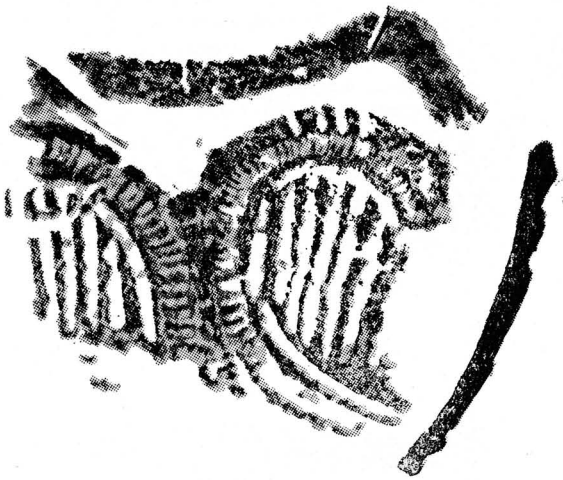


（縮尺½）

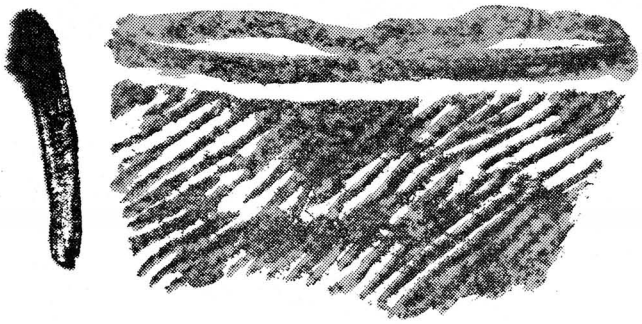
拓　　本　　3



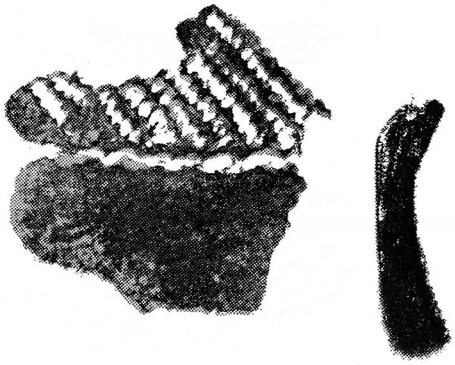
1



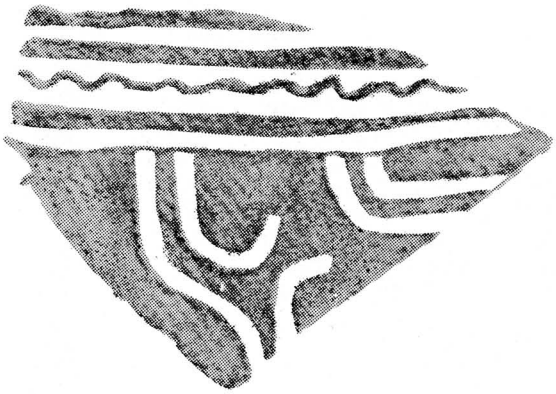
2



3



4



5

6

（縮尺½）